

---

# つまり

石本公也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つまり

### 【Zマーク】

N2964X

### 【作者名】

石本公也

### 【あらすじ】

高校に入って、猛は急な眠気に襲われてたおれる。そして、目が覚めた彼は女になっていた。

しかし、それは純粋に女になつただけではなくて……

## プロローグ

「アニメや漫画など、「その日は朝から変だった」とか言つ感覺があるのなら、俺はあつてほし」と想つ。何かが起つたのなら、少なくとも心の準備ができるだひつ、いつもと違つ事をして、その「何か」を防ぐつとしたりできる。

しかし、俺にはそんな事起つらなかつた。

変な感覺も無く、急に。

今——これで。

「つまあー、まつたく、今日もだるいなあー」

学校の下駄箱からそんなのんきな声がする。

「そんな事言つて、今日の授業は終わつたぞ、修  
おさむ」

俺はのんきな声の主に向かつて、軽く一言。

「まあな猛 たける、確かにもつだるい授業は去つた! 今日はもう自由なんだ! ……しかしながら

猛

下駄箱で靴を取り出しながら、修はニヤリと笑みを浮かべ、軽く小馬鹿にした感じで、

「いくらなんでも背伸びして下駄箱を出し入れするつてのは、どうかと思つぜえ? なんていこやがつた。

「つるそいわつ? 俺の場所が上の方にあるつてだけだろ?」少し苛立つたので、俺は反論。

俺の下駄箱は一番上なので、普通に取るつとすると、少し……少し

届かないものである。

「だがあ前しか背伸びして取るやつはないぞ？身長158cm」「つるさいわつ？人の氣にしてるところをつー！」

ウザいとは昔から思っていたが、人の氣にしてる事まで言つのならと、俺は修のスネに向かつて蹴りを入れ——

「つだあ！」

俺の脚は、修に届く前に、俺らに近づいて来た人に当たってしまった。

「ああっ！スミマセ……ああ、なんだ燕 つばめ か……」

蹴られた足を抱えてうずくまつてじるやつに向けて俺は謝罪でなく、呆れた声を出す。

「酷くね？俺お前に蹴られたんだが！」

燕と呼ばれた男子は、顔をあげるが、

「よお燕、お前も帰りなら一緒に行こうぜ」

修も燕の足を気にしない事にすると分かり、立ち上がった。その時である。

「…………？」

俺の視界がぐらついた。

それと同時に襲つてくる、抗う事の出来ない眠気。

「？ おい、どうした？」

「…………眠い…………」

外にいるところのに、俺は意識を失つた。

これが、高校に入つてすぐ起きた、災難の始まりだ。

## プロローグ（後書き）

初めての執筆です。  
よろしくお願いします

つまり、俺は女になつたのか

1ページ（前書き）

初めての小説の、第一話で6人も出すのは、やりすぎたかなあ。

### 性転換

男が女になつたり、その逆だつたり、  
クマノミとかの魚なんかで性転換する奴がいるらしい。  
異性に興味を持つ年代に、興味の方向がずれて性転換に行き着く奴  
もいる。

まあ実際、こんな事説明しても意味が無いのだが……

「…………つああ～」

目を開けると、真っ白な天井が目に入る。  
なんだろう、何したんだっけ?  
しばらく天井を見つめると、

「おつ猛、起きたのか。」

声が聞こえた。そして頭が活動し出した俺は、今自分がいるところ  
が病院で、俺は学校の下駄箱のところで眠つてしまつた事を思い出す。

「返事してくれよ。無視はねえだろ」

誰かいるのだろうか?俺はベッドから身を起こす。起き上がると見  
知つた顔がいくつもある。

「しつかしお前が倒れたつて聞いただけでも驚きだつてのに、お前  
すごい事になつたなあ」

眼鏡をかけた男子が、何故か感慨深そうに言う。

「だよな優太 ゆうた。俺まだ信じらんねえよ」

横にいる顔の整つた奴が言う。その後に

「こんな事つて本當にあるんだな」

「驚いたわ……」

なんて騒ぎ出す。倒れただけで騒ぎ過ぎなきがするので、

「お前ら、不思議な物を見た感じで……」

「俺が溜息をついて下を向いたときだった。

俺は固まってしまったのだ。

ベッドに髪が垂れている。

——俺の、頭から——

「…………なんだこれ？」

あまりの事に声がうわずっている……いや、俺の声が高くなっているのだ。

何が起こったわからなくなり、考えられない。パニックのようになり、ベッドがガタンと音をたてる。その音にきずいたのか

「猛つちよつと落ち着け！ちよつと鏡見せてやるから

長身の男子——修が棚の上にあつた鏡を俺に見せる。そこに写つてたのは、明らかな女の子の顔だった。

鏡を見る。そこには俺の顔ではなく、女の子の顔がある。頬をつねる。鏡の中の女の子も同じ動きをする、と同時に痛い。

俺は本当に女になつたのか、確認動作をする。

「どうだよ、不思議な事が自分に起こつた気分は？」

眼鏡の男子——優太がそう言つてきた。確認動作を終えた俺はベッドに座り直し、自分で事態を呑み込む為につぶやいた

「つまり、俺は女になつたのか」

今俺がいるのは病院の隅のベッドの上。

そして、俺の足元の方に俺の友達がいる状態だ。

夢ならこんなリアルじゃ無い。「冗談ならこの身体はなんだ？  
わからなくとも、わかつても変わらないんだ。事態をなるべく早く  
飲みこんだ方がいい。

「なあ燕、俺が倒れた後ってどうなったんだ？教えてくれ  
眠ったというのは少し格好悪いと思い、倒れた事にした。

「あ…ああ、お前がドターンってなつたら、ピカ一つになつて、ギ  
ュギュギュギュ一つて、気がついたら女になつてて

「すまん、会話から擬音語を外してくれ

子供のような説明は、理解しにくいぞ俺は、そしてその後、燕の説  
明を10回位聞いた所で、ようやく俺は理解する。

説明すると、俺が意識を失つた後、突然、俺の体が発光し出して、  
俺を覆つっていた光がなくなると、そこには女になつた俺がいたのだ。

「その後先生に説明して、救急車呼んで、今こうなつてるんだよ  
と、燕は語り終えた。

「先生に説明つて、信じてくれたのかよ

「そりや、お前を担いでたから簡単に納得してくれたよ

俺が疑問を言つと、整つた顔立ちの男子——和樹 かずき が答える。答えながら和樹はバッグを担いぐ。それを見てから他のやつらもいそいそと帰り仕度をする。まあ確かに、ここは病院だし、いつまでもいる訳には行かない。時計をみると、もう8時になつていた。「猛。明日ちゃんと学校来いよ。こここの病院、俺らの学校と関係あるところらしいからな。明日ここからお前は通うんだと」今まで黙つてた茶髪の男子——飾 かざる が去りながら言った。「学校行くつて、女の姿でか？」

冗談のつもりで言つた言葉に、

「「「「「勿論」「」「」「」

五人揃つてこの言葉。

……まじかいな。

## つまり、俺は女になつたのか

1ページ（後書き）

最初の方は次々と書いて「こんな物語なんだ」つてのを定着させたいです。

さて次回は学校です！

彼らの通つ学校について、ちゃんと説明するつもりです。

つまり、俺は女になつたのか

2ページ（前書き）

小説は思つたより書くのが難しいですね。  
ミスがでたり、話がとまつたり、  
まあ三回目です！

『私立清涼学園』えーっと、確かシリツセイリョウガクエンって読むーーは、中等部から大学部までエスカレーターの男子校。俺らは高等部になつてすぐだが、中等部でもともと中が良く、今でもよく6人で過ごす。私立と言つだけあって、寮までバッチリ、施設は充実して、快適な学校である。それでも学費が年1000万前後のは凄いとか親が言つていたな。

4月だからだろうか、俺はそんな事を考えながら下駄箱で上履きにすむーずに、あくまでもすむーずに履き替えて、廊下を越え、自分の教室に入る。

「どうしてなんだよー！」

教室に入り、また1分経つたかどうかと言つ所で、俺は飾に怒鳴られた。耳に響く。

「うるせえな、どうしたんだよ一体。」

耳を抑えて、和室でお茶を出す心構えで俺は飾に言つ。落ち着きなはれ。

「どうしたじやねえよ！俺あ昨日あんなことがあつたから、学校で美少女が見れると思つたんだよ！」

昨日の事は、病院の事だろうが……ははん、昨日あまり喋ろうとしなかつたのは、女になつた俺に見とれてたという事か。ふふ……

…………氣色悪いな。

「でもしあうがねえだろ？朝起きたら男に戻つてたんだからよ」教室の自分の席に着きながら飾に簡単に説明して、一時間目の授業を確認する。

「ああああああ？久しぶりの女子いい？」

「男子校病だから仕方ないんだろうが、明らかに変態発言はしない

で良いだろ」「

一時間目は古文で、ああまだオリエンテーションだから楽だなと思  
いながら、飾をあしらひ。

「変態つてひでえ？」「

酷いも何も、変態発言をしたのはお前だからな？そんな事をしてい  
るど、廊下からドタバタしながら燕が舞い込んだ。

「おー遅かったな。どうしたよ」

俺は走つて来たのか、息が上がつている燕に話かける。

「また…やつちつた……」「

ハアハアと肩でしていた燕は、不思議そうにこいつを見た。あまり  
特徴の無い髪が、耳を覆つていて暑そうに思つ。

「…あれ？…猛昨日女子に……？」

「ああそれな？なんか朝起きたら男に戻つてたんだよ。てか、また  
やつたのか？」

燕は肯定の仕草をした。また中等部と高等部を間違えたらしい。  
そうしてると先生がきて、授業が始まった。  
その後は、先生に事情を説明しただけで、学校は終わつた。授業は  
ほとんど寝たが……

「あれ？お前寮じやねえのか？」

学校が終わり、帰り道。修が話しかけて来た。

「ああ、今日も病院だ。男に戻つたから行く必要無いと思つんだけ  
どなあ」「

俺はふーっと長い息を吐く。春に似合わない行為だ。

「昨日はなんだつたんだろうな、ホント冗談に思えて來た」  
修が笑う。短めの髪が、ほんの少しだけ、風にそよいだ。

「俺はな、昨日ああだつたから安心してしまつたんだりつ。でもな  
？」

教室の外の廊下で、飾は真剣な表情……では無く、必死に笑いを堪えた表情をしていた。

「何で俺は今女になつてんだよ？」

「くくっ……し……知らねえよ……くく……あはははははははっガツ？」

人の目の前で、しかも人の不幸で笑うやつには、仕置きをした。鉄拳だ。

「いつてーな、殴んなよ。てか、ソワソワし過ぎだつて  
飾は、殴られた頬をさすつている。

「ソワソワすんなつてほつが無理だらろ……ただでさえ女になつた  
のに、周りがさつきから見てくんだから」

なんてつたつてここは男子校である。

当然、女子がいるのはおかしいから、周囲が不思議な目線を送つて  
も仕方が無い。

「たけるつううう！」

後ろから声が聞こえたかと思つと、いきなり後ろから抱きつかれた。  
「つひやあ？」

思わず素つ頓狂な声がでる。周りの生徒が一斉にこつちを見る。

「お~可愛い声だね~良いよ~イイよ~」

何処かのスカウトマンみたいな胡散臭い褒め方をした後、俺に抱きついて来た和樹は

「いや~男子制服を着た女子つて、いいもんだなあ~」

……どうやらこいつも、男子校に居続けておかしくなつてたらしい。

「お~猛。昨日は女子じゃ無かつたよな?」

今度はまえから、優太が話しかけて来た。

「優太……寝癖酷いな……」

飾が優太の頭を見てつぶやく様に言つた。優太は飾の言葉に

「寝癖じゃ無い、決めてんだ」

なんて言つもんだから、

「~「似合つてねえ!」「~」

ツツコミが三重奏となつて響いた。

その時、

『一年二組、神鎌 猛（かみかま たける）君、神鎌 猛君、至急保健室まで来なさい。繰り返します…』

放送で名前が呼ばれた。

「猛、呼ばれたぞ」

「ああ、きこえたよ」

俺は急いで保健室まで走った。走りながら、一時間そのままひっしご始まるものなんじゃないんだつたかと考えていた。

思つたより一話一話が短いな…

これから少しづつ長くして行きたいと思いました。  
さて次回は、保健室ですよ。

女になつたつて心境表現をもつてだせるよ! ひたしておつづけ。

つまり、俺は女になつたのか 3ページ（前書き）

更新は、結構大変な事だつたんですね。  
色々学んで行こうと思いました。

## つまり、俺は女になつたのか 3ページ

保健室に着くと、そこには校長先生がいて、他にも世界史の小鳥遊先生や、理科の高梨先生、体育の山田先生がいた。

俺が近づいていくと、俺に気づいた先生達は、笑顔を向ける。

「あ～神鎌君、あ～君が女の子になつたといことなんだけど、え～この先転校するにしても、どつちにしろ色々あるからね、今日は身体測定みたいなのが行うんだよ」

校長先生がこつちを向いて言った。またハゲに侵食されてるし、いやそんな事考へてるんじやなく、

「あの、そろそろ一時間目が始まると……」

俺はおずおずと疑問を言つと山田先生が、

「一時間目は体育だから、測定にしたんだよ」

成る程、納得。

「じゃ、後は高梨先生、お願ひします。」

校長、小鳥遊、山田先生の男性陣はそう言い残してさつていつた。

小鳥遊先生はなにしに来てたんだが、……。

「じゃあ、入りましょうか」

高梨先生にいわれて、俺は保健室に入った。

白のイメージが強く、壁には健康に関するポスター、学校で一番清潔な場所——保健室。

そのイメージに全く似合わない物があつた。

清涼学園の養護教諭である。

養護教諭の武川先生は、何故か汚れている白衣を着ていて、タバコをふかしている。

ボサボサな頭は清涼感なんてなく、掃除ロボットに「!!!」と認識されてそうだ。

「武川先生、測定を始めたいのですが……」

高梨先生が武川先生に話しかける。武川先生は、フーッと煙を吐き出しつけた。

「あこや

とだるそつてつぶやく。そして「よひこひな」と爺さんみたいに立ち上がり

「保健室を使う奴は滅多にいないんだかなあ

と言つていた。一昨日俺が倒れた時も保健室に運んでるはずだから、珍しいのだろう。

武川先生が出て行った後、高梨先生の

「さあ、色々測るから上着を脱いで」

と言われて、俺のぼーっとしていた頭が起きた。

いきなり放送で呼ばれたから、体育着を持つていない。俺はブレザーだけを脱いだ。

「えへっと、まずは身長を測りましょうかね」

毎回毎回、この身長測定機と対峙した時は、嫌な気分にさせられる。しかし、今回は女になつたからと言う事で身長を測るのだ、小さからうが、「女になつたから」という事で、傷付くことなんか——

「身長は……158cmね」

男の時と同じつて……。

そういうえば、制服も男ものだが、べつにぶかぶかといつ詭じや無いし、気付くところはあつたのか。

「次は体重ね。」

傷付いた俺を無視して、高梨先生が体重計のところから俺を呼ぶ。体重も、そんな変わつてないんだろうな。

「体重は……46kg」

いや、少し減つていた。男の時より三キロ減つてとこか……

その後の座高も男の時と同といつ結果だつた。

その他にも色々測つたんだが、思い返すのも恥ずかしいので割愛とする。

測定が終わつて、教室に戻ると、

「なあお前本当に猛?」

「さつきまでなにしてた?」

「女になつたつてことは……なあ?」

一気に質問攻めを食らつた。

「つるせえよ。一気に質問すんなりあえず落ち着けそして俺は俺  
だし、さつきまで身体測定だ、最後の質問には答える」

俺は矢継ぎ早に言葉を繰り出し、飾と燕の所へ逃げた。

俺が近づいていくとふたりは

「おお、終わつたか。どうだつた?」

「今日の体育は疲れたよ」

と、話して来てくれた。

「こつちは身体測定だつた。あんまし男の時とかわんなかつたな」

「男の時と変わらなかつたつて……ああ、だから目線がいつも通りだ  
なあと」

その言葉を言い終わつた後、飾は腹を抱えてうずくまる。身長に触  
れる奴には鉄拳てつけんだ。

「確かに男と女だし、色々違うけど、大きな変化と言つたらこの髪  
位だからね。」

「でも確かに、腰ぐらいまであるし」

燕の言う通り、女になつて一番の変化はここだらう。まつすぐで、  
腰まである黒髪なんて、アニメぐらいのものだからな。

「にしても寮に帰つてから話そつぜ。周りのやつらも聞いてるし」  
いつのまにか復活した飾が「確かに」と思わず言つてしまいそう  
な事を言つので、話を切り上げた。

その後の授業中。俺はずつと田線を感じて、全く集中出来なかつた。

つまり、俺は女になつたのか 3ページ（後書き）

考えてみたらまだまだ序盤…

さて次回は、清涼学園の寮の話です。

猛に新たなものごとが――

つまり、俺は女になつたのか 4ページ（前書き）

この小説を少しでもよんだひとに、精一杯の感謝を。

清涼学園の寮は、学校の北のほうにある立派な建物である。中等部から大学部まであるもんだから、4階建てなのにかなりの広さがある。しかも一部屋に一人という決まりがあるにも関わらず、寮は満員に近い。もう少しでかくなればイイと思つんだが、そこは予算という厳しい現実があるんだろうな。

そんな寮の一室に、俺ら六人は集まつた。

「フーン、つまり、男の時も女の時も身長はたいしてつ？」

「身長だけじゃねえよ

和樹が脛をさすつている。自業自得だ。

「でも他のところは男と女でちょっと違つんだろう？ 全く同じなのは身長だけなんだろう？」

「つるせえよ！ 確かに腹とか脚とかちょっと違つし筋量も減つてたけど！ でもほぼ一緒だつてのー。」

「つるさい怒鳴るな？」

優太が一喝し、蹴りが飛んで来る。

その後、俺と和樹は落ち着いて蹴られた頬をさすつている。

「でも体格がほとんどかわんねえって、女になつた意味なくねえか？」

意味ないワケじやないと思つが、確かに変化つてやつなら、もつと変化があつてもよかつたんじやないかと思う。変な意味はないぞ？ にしても、神様の気まぐれにしても、なんでこんな風になつたのかねえ。

その時、あまり喋つて無かつた優太が

「ちよつと思つたんだが、この女の子の時に猛つておかしくないか？」

この一言で、状況整理の為の話し合いは、

「確かに猛じやおかしいな」

「どんな名前にする?」

「沙耶ちゃん? 舞ちゃん? ビーナス?」

女の時の俺の名前決めの話し合になつたのである。なんなんだこれ……

しばらくして、俺の名前が満足いくものになつたのだろう。飾がその顔に笑みを浮かべて俺の前にいる。因みに俺は、話し合の最初の段階すでに弾き出されていた。

「では、お前の名前を発表する!」

声高らかにあげて飾がまっすぐに俺を見る。俺はもうどうすればいいのか分からなかつから、長い黒髪の先をいじつていた。

「お前の名前は神鎌 香架理だあ!」

名前。当て字にも程があるだろ……

「どうだ? なかなかの物だろ?」

「んじく得意なつてるようなので、俺は

「かかりつて名前はいいけど、漢字が適当すぎないか?」  
正直に伝える事にした。するとどうだろ?、飾は

「適当じゃあないつ!」

怒鳴られてしまった。めんじくせ。

飾の後ろを見ると、他四人がだるそうにじつちを見ている。じつちで投げたな。

「あー、分かったよ。かかりでいいから

てなわけで、女の時の名前は香架理になつた。ぱぴぱぴぱぴぱぴ……

「さあて、時間も遅いし、続きをまたにしますか」

その後、話し合いが雑談となり、しばらく経つてから修が切り上げた。

さて、少し前に書いたと思うが、清涼学園の寮は、一部屋に一人と  
いう決まりがある。もちろん俺にもルームメイトがいて、そして今  
の俺は女である。

まあ、そのルームメイトは紹介する必要ないんだけど、何故なら  
「じゃあ……かかり？こつからどうする？」  
俺のルームメイトは石岡優太いしおか ゆうただからである。

つまり、俺は女になつたのか 4ページ（後書き）

ひつやく序盤から抜け出しちゃう。なんかやつたー...トーンショングが上  
がつた。

さて次回は、寮の生活をお送りしたいです。

お楽しみ「？」

つまり、俺は女になつたのか 5ページ（前書き）

キャラが何人もいるのに、掛け合ひが少ないなどかんじて反省。

この後どうするとかれても、返す言葉にこまるワケで、俺は何かやる事がないか考えて、ある事を思いつき、優太に言つ。

「そうだな、一昨日も昨日も病院おじどだから風呂に入らうかな」この言葉を言つたら優太が突然ブツと笑つた様な音をだし、顔が赤くなつたり慌てたりと、なんとも不思議な行動をしていた。新手の神様への祈り方だろうか。

俺が変な物を見る様な目をしていりと、

「お前、結構落ち着いてるんだな」

優太が逆に俺の方を不思議なものを見る目でみていた。

「落ち着いてる？」

「いや、お前女になつたのに取り乱したりしてないから……」

「そこは……そうだな、確かに落ち着いてるな、俺は」

いきなり、突然女になつた事。それは世間の常識ではあり得ない事。なんだよなあ。

「ま……まあ、お前が風呂入つてる間に、俺はメシでも作つてるよ……」  
優太が何故か頷うなずきながら言つ。

「ありがたいが、わざわざ言わなくてもいいんじゃないか？」  
思つた事を言つてみる。

「え？ ああ、そうだな……あつじやあなんかリクエストあるか？」  
いつもは言わないような事を言つ優太。

ふと、俺は優太が何を隠そう考えていたかが分かつた。頭のなかでは、豆電球に明かりがついた。

「リクエストは肉じゃがと炒め物。後はきんぴらかなあ

「な！ お、おい！ なんで手間の微妙にかかるもの要求すんだよ」

優太が慌てる。どうしてかつて？

「お前、覗こうとかつて思つてないか？」

その瞬間、優太が固まつた。フフ……どうやら図星の様だな。

「やらしい事は考えないで、美味しい料理を作ってくれ  
俺はそう言って風呂に入った。

しばらく固まっていた優太は、フーッと長い息を吐き出し、料理に取りかかった。

冷蔵庫や棚から素材を出し、包丁などの器具を用意して、彼は料理を始めた。

別に適当に作つても良い筈なのだが、リクエストを取つてしまつたという理由で、彼は肉じゃがを作るらしい。

彼がジャガイモの皮を剥こうとした時、

「なあ 優太」

風呂に入つてゐるかかりの声がした。

「なんだ？」

作業を始め様とした手を止めて、彼は聞いた

「女の子って、どうやって髪を洗つてるか分かるか？」

質問の内容は、以外と重要なもので、しかし、男子中学から上がつて来ている男子生徒をやや驚かせてしまつものだった。

「わわわわかるわけねえよ？」

言葉が震えていた。

「風呂入つたはいいけど、髪の洗い方がわかんねえや。

それに髪つて濡れると張り付くのな。なんか気持ち悪いから身体の前に持つてつてみたけど…やっぱ変な感じが「だああああああああ？ 実況しなくていいから黙つてろー！」

俺が風呂に入つてゐる間に、食事の準備はできなかつたらしい。その後俺もつだつて、本日の夕飯は完成した。夕飯を食べている時、優太の顔が少し赤かつたが、どうしたのだろうか？

なんか話しづらい。

静かな食事は悪くないが、なんか重たい雰囲気で食べていると、食べ物の味が分からなくなる。だのに、空気が重たい。こういう時は、時間に任せるのがいいと思つたが、

「ゆ……優太」

あまりの気まずさに、俺は話しかけていた。

「なんだかさつきから「空気が」変な感じなんだが」「へ？ 变つて？ ど……どんな

「なんか「雰囲気が」重たいし、「安易に」動けなくて……」

「お前大丈夫か？……あつじやあサッサと寝ろよつ。うんそれがいいそうしよう。」

優太は一気にそう言つと、俺を一段ベットに押しやつた。俺はまだ眠いワケじやないが、別に何かやる事も無かつたので、そのまま寝る事にした。

疲れていた訳でもないのに、俺はすぐにねむりにたついた。

つまり、俺は女になつたのか 5ページ（後書き）

自分の小説を、読んでくれている人がいると分かつて超感動。その夜枕が湿つぽくなりました。  
さて次回から、かかりと猛のことに触れてこいつと想つてます。  
おたのしみにー

つまつ、この身体は……

1ページ（前書き）

ようやく第一章。「多分……」  
つたないなあとと思える自分の文を読んでくれている人に、心からの感謝を。

昨日、いつもより早く寝たからだらうか、俺は、いつもより早く起きた。外から鳥の鳴き声が聞こえるし、早起きは以外と心地いい。

俺はベットからおりて、洗面所に向かう。洗面所に着いて鏡を見る

「昨日とか三日前が夢に思えるな、これは」

鏡には、男の俺が映っている。

「つまり、朝起きたら男に戻つてましたワーワーって事か？」

寮から学校に行く途中で飾かざるが言つて来た。春の桜は、ピンクと緑が混ざつた色をしている。

「一昨日も男だつたぞ忘れんな

「まあな

ゆつたりした雰囲気と会話。陽気な天気は、色んな物事をどうでもよく感じさせてくれる。

「猛。て事は一日一日で男になつたり女になつたりするのか？」

優太が聞いてくるが、俺は答えない。

ついに春の陽気な空氣さえ遮断しゃだんし、だるく、面倒で、催眠術師さいみんじゅしがたくさんいる学校に着いたからである。

「今日もあの催眠術にどこまで対抗できるかだな」

俺はそうつぶやいて、校舎の中に入つてつた。

俺は少し考えが甘いようだ。男に戻つた——いや、男の状態ならば昨日みたいに周りの視線を感じることもないだらうと思つていた。

「いや、その考えは甘いよ、女の子になつた奴が、翌日には男に戻つてるとかぞ、十分おかしいよ」

燕つばがこう言つまで、俺は痛いほど視線が集まる理由が分からなか

つた。

「燕、いつになつたら学校は終わるんだ？」

「まだ一時間目始まつてねえよ？」

その日、俺はずつと**狸寝入り**を決め込——めなかつた。

休み時間になると、飾と燕が教室を飛び出して、俺は溜息をついた瞬でクラスの連中に転校生の様に囲まれ、質問ぜめにあつたのだ。学校が終わる頃には俺の携帯にはクラスの連中の名前がびつしりと埋まっていた。

学校が終わると気分がすつと軽くなる。俺にくる視線の量が減り、先生に無駄に当たられる事も無く、春の陽気な空気に触れられる。ああ、幸せだなあ。

「ところでお前ら、休み時間にどこに行つてたんだ？」

俺は桜を見上げながら聞いた。

「ちよつとな、先生に確認取つてただけだ」

修が答える。

「なんの？」

「なんかの」

追求しようとして、かわされた。

俺は修の表情から何が分からいかと思ったが、158cmと174cmとでは、顔を覗く事すら出来ない。しょうがないから諦めて、後の楽しみという事にしておく。

展開が早いかもしれないが、寮の中で俺ら六人は、また話し合いを行つてゐる。

「男になつたり女になつたりつてのは、やつぱり寝てる間に起きてると思う」

まず燕が口をひらいた。

「確かにそうだろうな」

そこに修が答える。

「こいつが寝た時にずっと見てれば、身体が変わる瞬間が見れるのか？」

「これは和樹だ。

「だったら俺は徹夜するね

「これは俺。

しかし、何人も喋つてると、だれが喋つてるか分からんな。

「なんで徹夜すんだ？」

和樹が聞いてくる。

「なんでつて……回避出来るならしたいだろ、こいつのものは「あき」と和樹は、呆れた目線をぶつけ合つ。なんでこいつは呆れた目線を送つてくんだ？」

「よし！じゃあ今日はオールだあ？」

飾の高らかな宣言に「おおつ！」と俺らは乗つた。この事が、後々面倒な事の引き金だった

つまつ、 IJの身体は……

1ページ（後書き）

IJのあとがきも、少し寂しいと感じたりそういうでなかつたり、さて次回は、友とはしゃべオールの話。お楽しみに。

つまづ、JRの身体は…… 2ページ（前書き）

脳みそこねくり回して考えても、なかなか浮かばない文章。  
難しいですね。

オールと言つても学生寮で行つから、あまつね出來ない。そこで俺らがやつたのは

「おい、そこ宝出で来るが」

「わーつてるよ」

「そこ失敗すんなよ」

「つるせえよ…………あ…………」

「なにしてんだよー」

ゲームと、

「俺この芸人好きだな」

「? 何がいいんだ?」

「まあ見てる……」

「…………つぶつー!」

「な? 面白いだろ? な?」

TVと、

「やつぱり地理の藤田先生はカツラだよ。じやなきやあんなに揺れる頭をどう説明すんだよ」

「確かにあの頭はおかしいよな、授業中笑つちやうわ」

「なんでカツラで? まかすんだ? 理解できん」

「お前は将来分かると思うよ」

「将来ハゲるつて言つてえのかおー!」

雑談をしていた。

そんな感じで順調に夜が更けていた時だつた。

「?」

突然、俺をあの日、校舎を出た出てぶつ倒れた時と同じ様な、抗えないと直感で分かる眠気が襲つて來た。

俺はそのまま倒れ、眠つて——思つたより早く意識を取り戻した。もちろん、女の身体で……

「つまり、こつから先お前徹夜出来ないな  
俺の方を見ながら、燕が言つ。

「こいつ、他に言つ事ないのか？」

「しかし驚いたな、俺が最初に見たのと変わり方が違う？」「  
変わり方が違う？」

修が気になる事を言つので、俺は尋ねる

「あのな、ズズズズズズってなつてふわーとなつたとおもつたら、  
ぱあつとなつて、お前が女になつてた」

燕がよくわからない言語で説明するのを無視し、俺は優太に説明を  
求めた。

「あー、だから… そうだな、ズズズズズズってとこは、なんか黒い  
モヤ？ みたいなのがお前の周りにでてきて、ふわーてとこはそのモ  
ヤがお前を包み込んで、ぱあつってとこはその包み込んでたモヤが  
弾ける様に消えたんだ、で、女になつたお前がいたと  
別に燕の説明を説明しなくてもいい筈はずなんだが。まじめ？  
え～っと、確か最初は俺の体が光に包まれたんだよな。で、今回は  
黒いモヤに包まれたと。… よく分からん

「おら、とにかく学校だ。準備しろ」

飾にせかされる。

「俺ら何してる？」

「たけ… かかりの準備が出来るまでんびりしてようぜ」

「よし… ここで待つてよう「外にいろ！」

部屋に居続けようとする五人を俺は廊下へ放り投げた。

学校の事なんか書いたつてしようがない。

周りの目線がやや減つて、催眠術師の前に俺はあっけなく撃沈げきせんし、  
別にどうでもいい事をホームルームでやつてくくらいだからだ。

そして寮の中で——も、あまり書く事がない。日毎に入れ替わり、徹夜が出来ないと知つたが、他に何をする訳じやない。

俺が不思議な状態になつてから、一週間弱経つから、珍しがらない。ただ和樹が

「かかり、一回でいいから『お兄様』と言つてくれないか？」

なんて言つので鉄拳を与えておいた。

こつからはイベントや行事が起つるまで書くこともないだろう。しばらくは気楽にいれそうだ。

しかし、そんな俺は、本当に甘い。

つまつ、JRの身体は..... 2ページ（後書き）

暇な時、ねり消しをこじつてます。

ぐにぐにぐにぐにぐにぐに.....

さて次回は、ややこしい事のうえなー！

つまつ、 IJの身体は…… 3ページ（前書き）

秋になって、寒くなつて、長袖をよくきるようになつりました。 IJ  
から朝、布団からでるのが大変になりそうですね

「おーー起きるー布団剥いじまつざー」  
朝、俺がこの後何も無いだらうと思つた翌日。俺は優太の声で起きた。

「なつかなか起きねえ奴は……」「うだつー！」  
「ぐあつ！」

優太の奴、まじで布団を剥ぎ取りやがった。

俺は丸まつて、優太にじつと ritto とした田線を送る。と、

「お前……昨日女だつたよな？」

不思議そつな田線で返された。

「…………うだつよ」

見事な安眠妨害を受けて、不機嫌な俺は、むすつとして言葉を返す。

「今お前女だぞ……」

「嘘つ？」

一瞬の不機嫌は一瞬で吹き飛んだ。

俺はベットから跳ね起き、ドタバタしながら洗面所の前に飛びつく。

「まじか……」

ひごとに性別が変わつていたのに、ある日俺は、一日連續女になつていた。

「一日連續女になつたつてお前……それにしても落ち着き過ぎでないか？」

寮の中で修が苦笑いして言つ。他の四人は、少し用事があるとかで学校だ。

あと、言い忘れてたが学校はもつ終わつてる

「落ち着き過ぎ？」

俺を見て落ち着いてる様に見えるのか?別に普通だと思つが……

「いや普通じゃない。女の時も風呂とかトイレとかある筈なのに、抵抗が無いお前は普通じゃない」

そう言われてみれば、俺は女の時に普通に風呂に入っていた。その時困った事といえば、髪の洗い方が分からなかつた事ぐらいだ。

—（あの後、ネットで探すのに苦労した）

やり方には戸惑うものの、女の時に見た裸には、戸惑う事はしなかつた。

そう修に言つと、

「お前、最近自分のタンスの奥の方。ひらいてねえな？」

修は、確認をとるみたいに質問した。

「ああ」

質問に答えると、修は溜息をついた。

「猛。お前変な身体になつてからそういうモンに無関心になつたんだな」

「…………えっと、つまり、俺は女にも男にもなれる様になつた代わりに、俺は性欲が消え失せたと」

「そーゆー事だ」

そーゆー事と言われても、納得出来ない。

俺がしばらく考えていたが、今聞こうとしていたのは別問題だと思ひ出した。

「で、俺が一日続けて女になつてんのはどうしてなんだ？」

「どうせあの徹夜だ。お前あの時ぶつ倒れたからな。」

答えはすぐに帰ってきた。

俺はパニックにでもなつていたのだろうか、よく考えたらすぐに当てはまる事をしていただじやないか。

「でも、徹夜した時の反動？は、どの位続くんだ？」

「そこはしらん。けど、男で徹夜した時と女で徹夜した時どじやその反動とかは違うのかもしれないし、色々分から無い事があるなうくん。この後何回も徹夜すんのか？」

それって結構辛いぞ……

俺がそんな事を考えていると

「まあ、身長の事はどうせせむつ止まつてゐるだらうし、徹夜しても問題ねえよ」

鉄拳？

「つぐつづ？」

修が俺に向かつて身長の事を言つたので

「まだ止まつてねえよー。」

俺はすぐに反論した。

その時、飾達が帰つてきたのだろう。

廊下の方から声と、何かをぶつけている音が聞こえた。

つまり、この身体は…… 3ページ（後書き）

性転換と言つジャンルは結構好きです。

戸惑つたり、精神が身体に対応してきた時の主人公の心境がとても良いんです。

さて次回は、飾達が持つてきた物の事。

お楽しみに♪

つまり、この身体は…… 4ページ（前書き）

10月10日の10時10分頃に第十話を投稿。  
朝から来て下さった方には申し訳ないですが、これだけはどうしてもやったかった。

飾達が帰ってきたのだろう。

廊下の方から声となにかがぶつかる音が聞こえた。

「おっ帰ってきたか」

俺がそういった時だつた。

扉が勢いよく開き、飾達も勢いよく出てきた。が、勢いよく開いた扉が壁にぶつかって跳ね返り、そのまま扉の方から出てきた燕に勢いよくぶつかつた。

「つたあー？」

燕が頭を抱えてうずくまる。

凄まじく馬鹿なことをしている奴等は、なにやら直方体の箱を持っており、どうやらそれを運んできた様で、俺はその箱が何なのか気になつた。

「おい、その箱はなんだ？」

俺が聞くと、和樹が待つてましたと言つ様ににたあーつと笑つた。

「気になるか？教えてやろう！」

そう言つて箱を勢いよく開けた。

箱から出てきたのは、やや明るい色のブレザー、綺麗で新しいYシャツ、そしてチェックのースカート。ブレザーの肩に着いている、清涼学園の紋章エンブレムこれは——

「清涼学園の女子制服だ！」

「ここ……男子校だよな？」

「なんで男子校に女子制服があるんだ？」

俺が素直に聞くと、

「ひことに性転換するお前の為に、校長先生が協力してくれたんだ素直に優太が答えた。それにしても、いつ校長先生に相談したのだろうか？」

「それよつた、さっそく着てみろよ。それ

修が俺に催促を促す。

「これ……サイズ合つてんのか？」

「かかり、身体測定受けてただろ？」

そう言えばそうだった。ほんの一週間前のことなんだよな。

「さ、俺らはお茶でも飲んで「出てけ」

ほかのやつらを部屋から追い出し、俺は箱から取り出した新品の制服に着替え始めた。

「あれつ？ ボタンが左右違う？ 裏返し……じゃないし、地味に女子と男子つて違うのか？」

制服の違うところなんかズボンとスカートぐらいだと思つてた。それに、スカートにファスナーがあるだなんて知らなかつたし、色々分からぬ事があるな。

「おーい、終わつたかあー？」

そう言つうと同時に部屋に入つて来る和樹。ノックとか返事を待つとかしないのか、こいつは。

和樹の後から他の四人も入つて來たが、その歩みはすぐに止まつた。真つ直ぐこちらを見つめる五人。

「なんだ？ やつぱおかしいか？」

俺が気になつて聞くと

「いやいや、女子が文物の服を着ると、こんなにも違うのかと」  
こんな答えが帰つてきた。

「すつげえな。スカート折つてないけど、先生達のセンスは意外と有るのな」

優太が感心している。たしかに、オシャレとはいひながら、ダサいワケではない。

驚いたな。

「明日お前は、これを着て学校來い！」

和樹が俺に人差し指をビシッと突き立てながら言つた。

女子制服にまだ慣れていない俺は、たとえ女の身体でも、それは少し恥ずかしいと思っていた。

つまつ、この身体は…… 4ページ（後書き）

あらすじをほんの少しだけ変えました。  
キーワードとかも増やそうとか思っています  
さて次回は、入れ代わる身体のいやしい実験  
お楽しみに～

## つまり、俺が女にしたワケで… 1ページ（前書き）

初めて読んだ性転換物は、性転換と言つより入れ替わり物で、しつかりとした形を持っている訳ではありませんでしたが、やはりそこからハマったんだと思います。

青い空、桜舞う道を越えて、新入生達は新しい生活を、新しい気持ちで迎える。

なんてゆう新学期の腐り文句が似合わなくなる程、桜はとうに散り切つて、葉桜と言った方がいいくらいに青々としている。周囲も高校に上がったばかりの時みたいにしてなくて、日々だるそーにしながら、学校に向かう。

教科書は全て学校に置いてあるし、学校の敷地内しきちないにある寮から歩いていてもくつ付いているこのだるさは、一体なんのだろうか？ そんな事を考えながら、下駄箱に行くと、

「どうして男になつてんだ」

昨日女子制服で来いといつてたからだろ？ か、和樹が下駄箱にいた。「しらん。朝起きたらこうなつてた。流石に男の状態で女子制服を着る訳にはいかないだろ？ どうやら、徹夜で強制的に変わつたら戻らないのは、一日だけらしいな」

「強制的？……」

何故そこに反応するのだろうか？

和樹はそのまま走つて行つてしまつたので、俺は背伸びをし、上履きを取り出すことにした。

教室に入ると、飾と燕がきていた。

「今日は久しぶりに体育に出れるよ」

そんな事をいいながら、俺は席につく。

「そうだな猛。ただ今日は縄跳びだ、縄を忘れてたら意味ねえよ」

俺は本当に甘かつた。

そんなこんなで学校が終わり、寮に帰ったが誰もいない。優太すらいなかつたのはどうしたのだろう? そう思つた時だつた。

「猛帰つてるかー?」

皆さん帰つて来ました。

「おー帰つてるぞー」

俺は的当に返事をする。

「なんか菓子でも出そつか?」

俺がそう言つて振り返ると、

「……お前らなにその顔」

全員、こつちを見てなにやらニヤニヤしている。何故だらう、気持ち悪い。

「なに考えてんだよ」

「明日の事」

「明日?」

はて、明日何かあつただろうか? 俺が考えていると修が

「ああ……まさか現実世界でこの謎に取り組めるとはおもわなかつた」

拳を握りグッとしながら言つた。

「謎?」

「ああ……考えてみたら分からなかつた謎……それが今は実験する」とが出来る!」

実験つて……なにするつもりなんだ?

「猛? お前は、徹夜をすると、強制的に性別が変わる!」

和樹……恥ずかしいと思わないのか?

言葉と同時に体も動いてるぞ?

「強制的に……この部分が、この実験で一番重要なところなんだ」

飾……何かに感染してないか?

なんだかこいつ等のテンションがおかしい。

話をするならいつもみたくその辺に座れば良いのに、わざわざ立ち上がつて、熱っぽく語る必要はどこにもないだらう。

俺は何でそんなにテンションが高いのか分からなかつた。

「お前ら… 実験とか謎とか言つてゐるけど、それは一体なんなんだ？」

その言葉を待つてましたと言わんばかりに、

俺にジレシッと指を突き立てながら言つた。

「 してゐる時に男になると、一体どうなるのかと言ひ偉大な謎に取り組めるのだよ」

……そんなピーとかバキューンとかで消されそうな単語を言わないで下さい…… つて

「なにするつもりなんだ？」

ちよつとまで、それは最悪な実験だ。

つまり、俺が女にしたワケで… 1ページ（後書き）

きっかけの物語は、進研ゼミの +.i 紹介マンガでした。また読んでみたいですが、もう記憶にしかありません

つまり、俺が女にしたワケで… 2ページ（前書き）

10月4日にスタートしたこの小説。

作中でも一週間経ちました。

これから小説はすごいはやいで時間が進むんだひとつなあ。

学校で俺は考えていた。

偉大な実験とやらに付き合えば、そりやあもつ大変なことになるだろつ。

そうなるのは出来れば避けたい物で、俺はあいつ等に見つからない様にどうやって外泊届けを提出しようか考えていた。

外泊届けとは、その名の通り寮では無く学校の外で泊まるのを許可するものである。

外泊届けを出さなければ学校も捜索に加わり、逃げられる訳がない。ずっと学校にいれば、あいつ等に連行されるだろつ。

外泊届けを出さなければ、逃げる術は無い。<sup>すべ</sup>問題は、外泊届けは寮に届けなければならない事だ。

俺は頭で考えた作戦を、頭の中で復習してみる。

まず、学校が終わったらすぐに外に出て、あいつ等が帰った後、寮に行く。

外泊届けは寮の入り口にいる人に出せば良いのだから、あいつ等が帰つてすぐなら部屋にいる筈だから心配ない。

だから、実験には協力しない！

そうして、終業の鐘がなるやいなや、俺は全速力で駆け出した。階段を降りて下駄箱に着き、靴を取り出そうとしている時だつた。

「お前の身長じゃ、どんな作戦を考えてようが、下駄箱で止まるから意味ねえよ」<sup>そい</sup>

呆れた目線を送つて来る五人。

こうして、俺の計画は下駄箱によつて阻止された。俺はやつぱり甘かつた。

「あ、もう諦めたらいどうだ？」

刑事ドラマにありそうなセリフを優太が言つ。そんな俺も、死刑執行を待つ犯罪者の様な心境だ。

「まあ逃げられ無さそうだけだ」

何回か逃走を試みたが、全て失敗した。眠りうとしたが、叩かれて起こされる。もう、実験に強制参加させられそうだ。

「おい、そろそろ時間だ」

修が言つ。何でこいつ等は俺の起床時間を知ってるんだ？

「ふむ、こよいよか…」

その言葉は、俺には悪魔の言葉に聞こえた。

色々言いたい事はあるだろうが、作者の年齢上書くことができないので割愛つー

「ううう……」

最悪の気分で目が覚めた。

飾が顔を覗き込む。殴つてやりたいが力が入らない。俺は体を起こした。と——

「その子は……誰？」

俺の視界に、さっきまでいなかつた奴がいる。

「お前らは、とても素晴らしい結果をだしてくれた」

修が言う。いやだからあれはだれだ？

「紹介しよう。……燕ちゃんだ」

あの娘が燕つ？

つまり、俺が女にしたワケで… 2ページ（後書き）

最近は、寒いなあと思つたり、暑いなあと思つたり、涼しいなあと  
感じたいです。

さて次回は、二人目の女子生徒  
お楽しみに～

つまり、俺が女にしたワケで… 3ページ（前書き）

空に浮かぶ雲は、不思議な模様を描いたりしています。あの雲何かに見えるんだけどな～って思つたり。

俺の視界が捉えたその子は、髪が俺の女の時みたいに腰までは無く、背中で止まっている茶が少し入った黒髪だ。

なんと言つか、美人顔。でも笑つたらかわいいだらうなーつてかおをしてる。

目線がどうしても行つてしまふのは、その胸。しかも完全な男物を着ているから余計に目立つ。

「えーっと、これが燕？」

俺は半信半疑で聞いた。着ている物はさつきまで燕が着ていた物だからだ。

「ああ……燕だ」

そう言つた和樹ですら、まだ信じていない様だ。

「じゃあ、お前らの見たままを教える」

今度はしっかりと聞いた。

話をまとめるといつなる。

俺の身体が変化する時、俺の身体が発光して、俺の姿が確認出来なくなるほどまばゆい光に包まれ、光が消えると身体が変わっているのと、黒いモヤの様な物が現れて、俺の身体を包み込み、モヤが消えると身体が変わっているのと、一つの変わり方があるのだが、今回はモヤが現れて、俺を包み込む時、そのまま燕ごと包み込み、モヤが消えると、二人とも変わつていたとゆう。

つまり、俺がいれば、人類股間計画は完遂出来る。

「明日もしこのままだつたら、一体どうすんだ？」

不安そうに燕が聞いた。しかし、聞かれても困る。

「学校……行くしかないだらうな」

俺は最初女の状態で行つた時を思い出していた。一週間、経つたのか。

「燕、我慢出来なかつたら保健室行つても平氣だからな？」

俺はそうこえをかけた。

教室で燕はやはり、周りの視線を集めた。

俺の時も視線があつた。ヒソヒソごえも聞こえた。何を言つてんのか分からぬから、どういう考え方で自分を見てるのか分からなかつたから、怖かつた。だからこう言つておいた。

「おお… ありがとう、どうしても我慢出来なかつたらそうする」

燕はそう言つたが、相当こたえてるみたいだ。俺は飾に話しかけた。

「おい、お前先生に話しつけてどこかの一時間身体測定であいつ教室から剥がしてくれ。かなり参つてるぞ」

「お前みたいに神経図太くないからな、あいつ。分かつた、武川に言つてみる」

飾はそう言つて教室を飛び出した。

授業はまだ三時間目なのに、燕はもう氣分が悪そうだ。この後、耐えられそうには見えない。その時

「一年三組、山瀬 燕君、一年三組山瀬 燕君、至急保健室に来なさい。繰り返します。一年三組……」

飾が上手くやれたみたいだ。これで大丈夫だろう。俺はそう思つたが、フラフラと教室を出た燕を見て、少し不安になつた。

つまり、俺が女にしたワケで… 3ページ（後書き）

夢で見た事もないアニメを見たりします。  
この小説も夢が元だつたりします。  
さて、次回は、慣れも疲れも  
お楽しみに。

つまづ、俺が女にしたワケで… 4ページ（前書き）

一度だることと思つてしまつと、その後の事はできなくなつてしまつます。だるいと考へない様にします、

「なあ、俺が元に戻る方法はないのか?」「寮に帰つて燕が言つた。かなり切実そうだが

「考えとしては、今度は逆で をすれば戻るが、今のこいつのは多分ジジイより酷そだだから」

修が希望もなにもない事を言う。

「つまり、俺は戻れないと」

燕がうなだれる。こいつが女になつてから一度寝ていて、その時変わらなかつた事から、燕は俺の様に身体が変わらない様だ。空気が重くなる。飾が落ち着き無く動き回つて、カレンダーの所で止まつた。

「おい、でももう『ゴールデンウィークだぞ。燕、この期間を使って慣れておけよ』

この一言で、重かつた空気がガラリと変わつた。

「そうだ!『ゴールデンウィークだ!』

「遊びぶぞ!遊びまくるんだ!」

「学校が無いんだ!はつはつはつ!」

「ゴールデンウィーク……五月にある連休だ……そうだ!もう五月だ。ふと燕を見ると、まだなにがあるのか、考へている。いつまでも暗いと殴りたくなるなあ

「休みの事考えよ!ぜ、不安だらうが」

すると燕は、

「あ、そりじゃ無くて、夜じつじよつかと」

「夜?何の事だ?」

「俺の相部屋、和樹なんだよね……」

……それは確かに考えとかなきやな。

そこにゴールデンウィークで盛り上がりつて來た飾がやつて來た。

「良く見るとお前ら背丈ほとんど一緒だな」

飾は何故か陽気だが、まあ確かに、今まで見上げていたかおが、目線の先にある。

「お前身長幾つだった？」

「155」

短く答えがかえってきた。それを聞いて俺はガツツポーズを取る。ついでに踊り出す。

「おい猛。お前いつ頃家に行くんだっけ？」

優太が聞いてきたが、俺の耳には入らない。

「聞けっ！」

頭を思いっきり叩かれて、俺の喜びの舞は終了した。

「家族のところにはいつ頃いくんだ？ 猛？」

家族は、俺が女になつたと言う事を、学校から連絡で聞いているだけだ。だから俺は家族に、ゴールデンウイークには帰つてこいと言われている。

「早めに行っておくよ。」

俺はそう言つて、修達の方を見ると、和樹が縄で縛られていた。

次の日。俺達は、優太の荷物と、燕の荷物を運んでいた。昨日、和樹と同室だと危ないんじやないかとなつたからだ。（男と女なら、誰でも危ないだろうがな）

そして今日、寮母さんに許可を取つて荷物を移動させる事にしたのだが、突然の事で、俺達が荷物を運ぶ事になつたのだ。

しかし、日 nich を間違えたな。徹夜してから一日経つたから、今俺の体は女だし、今日はお天道様も頑張つて、気温が三十度まで上がる様だし、その中で働くと、汗がすごい事になるのだ。重たい物は男子共に任せて、俺と燕は小物を運んでいる。

因みに、燕は女になつてからも燕だ。

俺の時みたいに名前を変えようとしていたが、燕と言つのは女の子の名前でもおかしくないだうとの事で、燕のままだ。

「ほり後それだけだよ、頑張れ日本男児！」

なんて言葉とともに、最後の荷物が運ばれ、もう夜になつていて、一応引っ越しは終わつた。クタクタに疲れてすぐに寝ようとしていた燕を、風呂へと押し込んだ。俺も出来れば寝たかつたが、風呂に入らないとまずいと思っていたので、燕が出た後すぐに入り、シャワーで済ませ、倒れる様に眠つた。

明日は、家族に会いにいく――

つまり、俺が女にしたワケで… 4ページ（後書き）

ゲームをしている時のタブーは、やつてゐるときほり、これ将来役に立つんだろうかと考える事です。  
さて、次回は、家族登場。  
お楽しみにー

## つめつゝ、1ページでどうなーぐ？ 1ページ（前書き）

今日この小説は100000アクセスを突破しました。 ものすごい感動が心の底から溢れています。  
ありがとうございます！

久しぶりの自分の家。

その前で、俺は考えていた。

前に来たメールでは、俺が女になつたと知つた、と言う様な内容だつた。しかし、実際俺は男になつたり女になつたりと、色々面倒な身体になつたのである。家族がこの事を知らなかつたら、俺の口から説明する事になる。

だが俺は、女になる瞬間、男になる瞬間、肝心なところは聞いた話だ。上手く説明出来るだろうか？

まあ、考へても仕方がないだろ？ 俺は扉を開い——カギが掛かつてゐる。

気を取り直して、俺はインター ホンを押した。しばらくして、カギの空いた音がして、扉が開いた。

「猛？」

「よつ母さん。帰つて來たよ」

玄関で母親と少し話してから、俺は中に入りリビングに向かつた。

「久しぶりのアターック！」

「ガツ？」

弟が蹴りをいれて來た。公立の中學に通う弟は、空手部に入つてゐとかで、成果を見せ付ける様に俺にぶつけて來たのだ。がはつ！ 家に帰つて來て一分も経つてないのに床に手を付けさせられるとはな。

「いてーよ。阿呆が…」

俺が腹をさすつてるので、つまらないのだろ？ 弟が俺の前に来て、わざとだろ？ 見下ろした。因みに弟は167cmある。

「おい、わざと見下ろすな、お前の机の下から三段目の奥にある菓子食い尽くすぞ」

「なんで知つてんの？」

そう言つて弟は一階に駆け上がつた。リビングを見渡したが父さんがいない。「ホールテンウィークなのに忙しくしてゐみたいだな。さて、俺も自分の部屋に行くか、

「猛。さつき翔<sup>かけの</sup>の声がしたけど、何かしたの?」

「多分お菓子を移動させてんだろう。

「別に、なんでもないよ」

俺はそう言つた。

「そう。学校からね、お前の事を聞いてたけど、その、女の子にもなるつてのは、やっぱり本当なの?」

にもーーーと言う事は、俺の事はしっかり伝わつてる様だ。

「まあ、ホントかな」

俺はそう言つて自室に向かつた。

自分の部屋の扉を開ける。そこは、前と変わっていなかつた。小学校のころの、自分の部屋。清涼学園で寮に入つてから、たまに帰つて来ているが、あえて部屋を変えてない。最後に来た時から、まだ一ヶ月なのにな。

本当に、懐かしい。

きつかけがあれば、昔の事も思い出せるんだな、柴田、山陰、朝道、

桑原。

思つたより、思い出せた。

夜、俺は明日がどうなるか、と考えた。明日は女になるからだ、家族は一応知つているが、それでも現実として来るのは重たいだろう。それでも、家族揃つた晩ご飯は、とってもうまかった。

つまつ、1ページでどうぞ〜〜？ 1ページ（後書き）

お気に入り登録数も増えて、嬉しいです。  
初めての小説でこんなになると思つてませんでした。

つまつ、1ページどうじかーく？ 2ページ（前書き）

小説執筆場所は主に布団の上です。ふつかふかでないのが残念です

目が覚めた。

俺は思いつきり伸びをし、手櫛で髪を撫でる。それから俺は階段を降りた。そして、

「うわーー！」

驚いた。なんてつたつて家族揃つてソファーに座り、皆一様にこちらを見ていたからである。

「何してんの？」

たまらず俺は聞いた。だつて不思議なんだもん。

「ふむ、これが女の子になつた猛か」

父さんが顎に手を当てて言つ。しかしその姿は、全く渋く無く、ただの太り気味のおっさんだ。

「これが兄ちゃん？すつじく可愛い顔してゐるよ

おい翔、俺は性格もいいだろ？が。

「本当に……本当にのね」

母さんだけがまともなのか、未だに信じられないのだつ。

ところがすぐに、

「でも、なんで服は変わらないの？せつぱり戦隊物とかの変身とは違うのかしら」

目で見た物は全て信じ、ヒーロー物のドラマを見ている母親に戻つた。ホント色々変わらないな。

「猛。もしかしてあなた、学校でも男物着てるんじゃないでしちうね

そんな質問朝からするのか。

「まあ、制服以外はそうだな」

俺がそう答えた瞬間、うちの母親は顔を輝かし、ソファーに座つている面子おもてに命令する。

「お父さん車だして、ヒーローのはせつわとやつた方がいいわ、猛

はさつさと朝<sup>さ</sup>飯<sup>シ</sup>食べて、久しぶりの家だからって、昼まで寝てないで頂戴。翔。ついでにあんたの服も見に行きましょ、みんな早く準備して!……さてと、ポイントカード<sup>アドバイス</sup>したかしら「ともまあ、急に慌ただしく家族が動いた。

「ところで、母さん。車を出すって何処に行くんだ?」

父さんが聞くと、

「<sup>レ</sup>の娘の服を見に行くの!」

母さんは俺を指差して言った。

やや大きめのショッピングモールで、神鎌家の母親はウキウキしながら服を選んでいる。

今まで家に女の子がいなかつたから嬉しいのだろうが、歳考えろ四十後半。

「今日お母ちゃんどうしたの?」

翔が聞いて来る。俺は

「暴走<sup>ぼーそ</sup>してんだよ。」

と言つておいた。すると母さんが<sup>レ</sup>に手を振つてくる。俺を呼んでくるじ<sup>レ</sup>。

俺が近づくと

「とりあえず、これと<sup>レ</sup>と此れとこれと<sup>レ</sup>を試着室<sup>そじ</sup>で着て」と、かなりの量の服を渡されて試着室に押し込まれた。普段ならあり得ない早業に、俺は呆気に取られた。

「ほら、早くして

急かすのが早い!

じゃなくて、この服はどうやって着るんだ?俺は色々迷つた末、なる様になれと適当に着た。その後母さんに怒られて、服を変える度

に注意され、着方を直し、また新しい服を渡されてと言つ行動が、ずっと続いた。

「はあ……」「……」

ベンチに座り、俺は溜息をついた。

足下には、色んな服が入つてゐる紙袋がある。

女になるのは一日起きなので、そんな量はいらないと思つたので、服を色々削つたが、紙袋はとても重たい。

母さんは、いま翔の服を見ている。翔はまた服が小さくなつたらしい。俺はここ数年、服がきつくなつたと感じただろうか？

「猛、お前やつぱり、明日学校に戻るのか？」

不意に父さんが聞いて來た。

俺はああ、と答えた。

ほんの少し、父子で話した。懐かしい話だ。

「後、時間的に門限間に合ひそうにないんだよね」

柱時計を見ながら俺はつぶやいた。母さんはまだ翔の服を見てゐる、

「母さんには、俺から後で言つておくれよ。まだ間に合つんだら？」

父さんが言つた。

俺は立ち上がつて

「正月…最低でも正月には、帰れるから」

そう言つて、紙袋を持つて学校に帰つた。

ショッピングモールで、しかも父さんにしかきちんと別れを言えなかつたが、また集まれるから、気にしなかつた。

つまつ、一ページでさりとてへ~ 2ページ(後書き)

一度寝の心地よさを半端にないです  
ね、次回は、たしなみでしあが  
お楽しみ、こ。

つめつ、1ーるやさうばーく？ 3ページ（前書き）

実はこの「ゴールデンウイークが終わると、なんにもネタがない状態になります。

今一生懸命探しています、ネタ。

「つと、おーい帰つて來たぞー」

俺はなんとか門限に間に合い、寮に帰つて來た。部屋が暗かつたから、燕は寝ているのだろう。俺は中に入つて持ち物を軽く整理し、ベットに向かつた。そして疲れも手助けしてか、簡単に眠りについた。

次の日、

俺は朝早くに目が覚めた。

ゴールデンウイークは、休みが五日間だが、その間の宿題の量は半端じやない。

とても五日で終わる量じやないから、それをかたづけないとな。そう思つてベットから降りると、燕の顔が目付いた。そして、ベットに広がる髪を見て

ガンッ！

「つたあ！」

殴り起こした。

「つたいなあ、なにすんだよ」

頭をさすり、涙目になつて燕が言つ。

「こつちが聞きたい。その頭はどうしてそんなになつてゐるのかと」俺は燕の髪を見た。所々ゴワゴワしていて、毛先に行く程酷くなつてゐる。多分面倒くさがつて適当にやつたんだろう。切らないのは、他の四人に言われたからだ。きっと。

「頭？ 別に普通だろ？」

なにも知らないでそつと燕の頭を、俺は掴んで洗面所まで引っ張つた。

「お前も学校で色々語つてたろ、髪は長くて綺麗なのが良いつて、だのに、なんだこの痛み切つたこの髪は

確かに四四〇ぐらいの前は綺麗に背中に降りていた。元の髪質は良い方なはずだ。

「いや、なんかグチャ一いつてなるし、今休みだからさ」

今はパソコンがあるのに、こいつは急けたのか。

「洗い方教えるから、頭出せ。」

洗面台に首を出させ、上からシャワーをかける。解りにくいやつなら、頑張ってくれ。

風呂場から取つて来たシャンプーで、燕の髪を洗う。風呂に抵抗でもあつたのだろう。結構汚れている。シャンプーを一度がけして、リンスをする。インターネットと実体験で学んだ事を思い出してやつた。

終わつたら、ドライヤーでしっかりと乾かし、その後燕に洗い方を説明した。みつちり。

「あー宿題やつとこいつと思つたんだがなあー」  
俺はふーっと息を出しながら言つた。

「ところでさつきから気になつたいたんだが、あれはなんなんだ?」  
燕が指さした方向には、俺が昨日おいて置いた紙袋。

「ああ、昨日家族と買い物に行って買った服だよ。見てみるか?」  
俺がそう聞くと、燕は領いたので、俺は紙袋を手に取つて、中の物を取り出した。

「これ……女物?」

中から出て来た服に、燕は戸惑つてゐるのだろうか。目を丸くしてい る。

「別におかしくないだろ。まあ今日は男だしな。燕、お前きてみる か」

俺は手元にあつた肩の出るタイプのシャツを見せた。燕はふるふると首を振る。

「これは?」

次は普通のTシャツとスカート。燕はこれならと思つたらしく。ゆ っくりと頷いた。

燕に服を渡して、着替てる間に服の整理をした。そのと燕が胸の部分を抑えて

「…………キツイ」

とつぶやいた。ああキツイんですかいキッショウ。

「ふーん、中々、いやかなり似合つてるな」

衣物を着ている燕を見て、和樹が言った。

「確かに映えるな」

修も賛同している。

俺は宿題を片付けている。

燕は、慣れないスカートが気になつてゐる様だ。

「よし！私服が手に入つたなら明日ゴールデンウィーク最終日、遊びに行くぞ！」

飾はそう言った。

俺は、数学の文章題にてこずつっていた。

つまつ、ついでさうじーく？ 3ページ（後書き）

女になつて、とくべつられた話が一通り終わると、後は普通の学園物になりますね。

何か工夫出来ればいいです。

さあ、次回は、無駄？

遊びに行くと言われた。

言つた本人は、すごい事を思い付いた子供の様な笑みを浮かべている。

俺らはと言つと、突然の大声に何事かと驚いて固まつていた。

「遊びに行く？ 明日？」

修が和樹に聞いた。和樹は笑みを崩すことなく

「ああ、明日だ」

普通に返した。修が反応出来てない。

俺は宿題をしていた手を止めて、和樹に聞いた。

「遊びに行くつて何処に行くんだよ、そしてなんで遊びに行こうと思つた？」

和樹は俺の方を向いて

「何処かは後で決める」

と言つた。決めてないのかよ。

「なぜ明日遊びに行こうと思つたか？ それは簡単。お前らが女物の私服を買つてきたからだ！」

でーんと言つ効果音が付きそうな宣言に、俺らはただ呆れていた。

「この服、たけ…かかりのなんだけど…」

燕が服を弄りながら言う。

「確かにこの服は俺の物で燕のサイズに合つてるのは無いぞ」

俺は和樹にそう言つた。

「大丈夫だつて。着れてるじゃん」

いやそう言う問題じやねえよ。

燕が着ている俺のシャツにプリントされているウサギさんがすごい事になつてゐるのに気づかないのか？

「で、遊ぶ場所はどうするんだ？」

優太がソファーから聞いた。ここは俺らの部屋だ。一応。

「それなんだが猛。お前女になつてやりたい事とか無いのか？」

質問を言つたのは優太のはずなんだが、和樹は俺に言つてきた。燕が何故か恥ずかしそうにしていたのが気になつたが今は関係ない。

「そりだなあ。あんましないけど、強いて言えばカラオケで高音の歌を歌う事かな」

俺が答えると一瞬妙な空気になつた。しかしその後には

「まあ、考えてみたらそれも女になつてやりたい事ではあるな

「よし！じゃあ明日カラオケで盛り上がろうぜ」

パーティーの様な盛り上がりを見せたので有つた。そのパーティーは夜まで続き、俺らは寮母さんに怒られた。

「起きる。服どうすんだよ。まだ決めてないぞ

次の日、俺は燕にゆさゆさと起こされた。

「朝から服決めか？お前段々変わつて來たな

起こされて少し不機嫌な俺は燕に言つた。

「な…変わつてないよ…てか、まだ一週間だからな？」

スルーする訳でもなく、突つ込んで来る訳でもなく、眞面目に返された。

どうすれば良いのかわからない俺はとりあえず起きる事にした。たつた十着程度の服を選ぶのには、そう時間がかからなかつた。だつて、俺も燕も、まだ女物の服に慣れていないからだ。服を決めて、食事を取つていると、飾達が來た。

「もうちょっと可愛い服なかつたのか？」

俺らの格好を見るなり飾が言つた。

「残念ながらこれが限界だ」

俺らの格好は、はつきり言つて男物に近い。

まだスカートに慣れたワケじゃないし、街中で着るのには抵抗がある。

だから、シンプルな感じになつていてる。

「まあ気にしないでカラオケ行こうぜ。昼のフリータイムに間に合わなくなくなつたら大変だ」

優太が腕時計を見ながら言った。フリータイムに間に合わなくなつたら、金がかかる……俺らは急いでカラオケに向かつた。

カラオケは、別に大きな店ではなかつたが、別に普通に楽しめた。高音キーの歌を歌いたかつたが、残念な事に曲が分からぬのだ。アニメのオープニング曲などを歌おうとしたが、一番と二番でメロディが違うと大変な事になつた。半端な感じになつてしまつたのがなんか辛い。

そんなこんなで「ゴールデンウイークは過ぎて行つた。

つまつ、いーるでさうこーく？ 4ページ（後書き）

勢いで書いたり、考えて書いたり、自分の中でも書き方って違うんですね。  
次回、季節といつもの。  
お楽しみ。

## つまり、落ち着きました 1ページ

「はい、ではこれでよろしいですね？」

昨日まで降っていた雨も上がり、まだ所々に水たまりがあるが、それでも久し振りに良い天気だ。すっかり緑になつた桜も、太陽の光を浴びて生き生きしてゐる様に見える。

「はい、ありがとうございます。」

気温が高くなつて來たが、まだまだ暑くは無い。それよりは、湿気が気になつて來る。

「おーい、燕、届いたよ。」

俺は今受け取つた荷物をリビングに運んで、燕を呼んだ。すると風呂の方から燕が濡れ髪を拭きながら出でてきた。

「届いたつて、何が？」

燕が髪を拭きながら聞く。俺は届いた荷物を解いて、燕に見せるよう蓋を開けた。

「夏服。」

今は、六月だ。

「へえ夏服か。もう届くんだね。ところで、箱が三つあるのは、燕が箱わ覗き込みながら言つた。リビングにおいてある箱は、燕の言う通り三つある。」

「俺のと私のとお前のだと思つよ。」

ゴールデンウイークから現在までの約一ヶ月。普通に日常生活は進んでいた。そりや、学校の方で色々あつたりしたが、大したじやない。大した事と言えば…

「じゃあさ、取り敢えず着てみよう。サイズ合はせてあるかどうか確かめるよ。」

「その前にお前変わつておいた方が良い。」

この身体、実は自分の意思で男でいるか女でいるかが決められた。ただ徹夜した時は相変わらず変わる事が出来なかつた。では徹夜しなければほとんど男ですごせるかというとそうではなくて、どうやら男で過ごした時間と女で過ごした時間のバランスらしいのだが、詳しく述べられないでいる。

取り敢えず俺は女の体だ。

シャツも半袖になると雰囲気違つなあと思つていた時だつた。

「おーいお前ら元気してるうー？」

和樹がドアを開けて飛び込んできた。

俺らは夏服に着替えてる最中で、その格好は——

「やあああああああ？」

俺の横で悲鳴が上がり、俺は部屋にやつて来た男子に向かつて拳を勢いよくぶつけた。

「なにもここまで……」

普段着に着替えた俺らの横で、和樹が倒れている。修は、和樹のほうをチラシと見ながら言つた。

「しようがないだろ？ 着替えの最中にいきなり入つてこられたら、元男子でも動搖するよ」

燕は下を見ながら言つた。

俺は考えたら手を出す理由が思いつかなかつた。反射的に不届者を殴つていた。

だがこの不届者も悪いワケで、気にしないでおいづ。

「でももう夏かあーまだ四月に感じるな」

修が麦茶を眺めて言つ。氷の入つて無いコップの中で、麦茶は残り半分くらいだらう。その残りを一気に飲み干して、

「そういやお前らテストどうだつた？」

ぶらつきぼうに嫌なことを言つた。

「お前、なんで今そんなことを……」

修を見ると、悪気がなさそうな顔をしている。そう、なさそうな顔だ。

実際あの状況でテストの結果が良いやつはいない。突然自分が女になつて、そしたら今度は友人を女にして、家族に説明しに行つたら文物の服を買い、一段落と思ったら本当は自分の意思で身体を変えられますつてなつて、テストで良い成績なんか無理と言うものだ。

俺が愚痴つていると、燕が

「何言つてんの、お前結果貼り出された時ちゃんと名前書かれてたじゃん」

睨んで来た。

「でも一十点落としてんだよな」

「普通あり得ない事が起こつたのにちやつかり勉強して、一十点しか落とさないやつはいないとおもつ」

睨み続ける燕を無視して、俺は夕飯の準備に取り掛かる。

不思議と落ち着く、ただの日常だ。

つまり、落ち着きました 1ページ（後書き）

段々文章力がなくなっている気がします。  
何とか立て直したいです。

つまり、落ち着きました。

2ページ

外は、雨が降っている。

昨日あんなに晴れていたのに、外は雨だ。

嬉しいのは、傘もさせない土砂降りでなく、傘をささうかどうじようか迷う霧雨でも無い、雨らしい、静かな雨であることだ。

俺は大きく息を吸って目を閉じる。しばらくすると、ほんの一瞬、体の感覚が消える。そして目を開ければ鏡の中に、男の俺がいる。自分の意思で変わるとときは、落ち着いた状態出ないといけない。だからだろうか、最近、何事も動じなくなつた。

「いや、元々だと思うよ」

いつの間にか燕が後ろに居た。湿気を散々吸つたようで、髪が所々跳ねている。

「雨なんか嫌いだ」

寝癖を直しながら燕がぶーたれる。

「知らないな、俺は。」

「お前も寝癖直しの大変さを知つておけよ」

「女の時は髪質が凄いから、寝癖が出来ない

「するくないその髪?」

「雨は別にいいんだけど、ズボンの下が濡れるんだよな」

今度は和樹がぶーたれてい。

傘をしての登校。あじさいではないが、道の横にある草木が綺麗に見える。

女の時にこの状態で傘なんか回したら、結構絵になるんじゃないかな。自惚れか。

「暑いのがこの後來るんだもんな。涼しげって氣分、今のうちに味わつとかないと」

飾はそう言つて傘を思いつきり回した。

「なつ、いきなり回すな！水がかかつたじやねえか！」  
飾の横に居た修が飾を睨む。二人のさしている紺と茶の傘が、俺の前で閉じたり開いたり回つたり、どうやら水のかけあいをしている様だが、お前らいくつだよ。

そうしてゐるうちに、学校について。

「ここに来る度に思う。なんで俺だけ取りにくい場所なんだろうな」  
下駄箱を俺は恨めしく眺めた。

「普通は最上段でも取れるぞ、お前の背が低いだけだ」  
優太にさつ言われたが、必死に上履きを取つてゐる俺には聞こえない。

教室。学校と言つのは案外暇でホームルームが始まる前ぐらいしか面白い事がない。

そのホームルームが始まる前、俺は携帯を見ていた。

「ん。今日の占いか……」

検索エンジンのサイトの、エンターテイメントコーナーの、占いと言つ文字が目に付いた。

「占い？面白そうだな。ちょっと見てみようぜ」

飾が後ろから言つて來た。人の携帯を後ろで覗き見るのはマナー違反だろ？

「お、早く開けよ」

飾にせかされて俺は占いページを開く。えーっと、射手座は……

「五位か」

半分より上だが、微妙な順位だな。

「占い？どれ、うつ十位」

燕が後ろから言つて來た。ここからマナーがほんとになつてないな。

「飾、牡羊座最下位だぞ。」

「…………知つてるよ」

割とこいつは気にする方なのか？

飾において置いて、俺は射手座の詳しい結果をみた。そこには、思

つても見ない事が起こるよ、と書かれていた。

思つても見ない事は、一ヶ月前に起こったよ。

つまり、落ち着きました。

2ページ（後書き）

何故か第七話がこの話で人気です。  
どうしてか解りません。

つまり、落ち着きました。 3ページ

学校が終わると、俺らは自然と集まって、帰る事になる。

下駄箱からでたところで、俺は空を見上げた。

「だいぶ雨弱くなつたなあ。まだ降つてるけど」

そう言って傘を差そうとした時だつた。突然、どこから飛んできたのかボールが俺の頭に直撃したのだ。

「ぐあつ！」

バランスを崩した俺はそのまま倒れ、目の前に合つた水たまりにダイブした。

「おい猛。 大丈夫か？」

修が顔を覗き込んでいる。

「なんとかな…」

俺はそう言つて笑顔を作つて見せた。

「おーい、お前らボール投げんなー」

飾が下駄箱の中に向かつて言つた。どうやら廊下でボールを投げ合つてた様だ。

「飾。お前もボールを投げんな」

優太が飾を注意した。

「猛、お前制服凄い事になつてんな」

水たまりにダイブしたんだ、汚れて当然だろつ。だがここまで見事に汚れるとはな。

「こりやクリーニングしなきやつてレベルだろ」

修が俺の服を見て言つた。俺は、朝見た古いを思い出していた。確かに、思つても見ない事が起つた。

次の日。

男物の制服をクリーニングに出しているので、必然的に俺は今女になつていて、女子制服を着ている。

「全く、今日も雨とはね」

燕が横でぼやいてる。傘をさし、静かに雨の音を聞いていれば、雨もそれ程嫌じやないと思うのだが…

俺がそう言ひと、

「歩きにくいの嫌なんだよ」

と燕が言つた。最初はよく分からなかつたが、歩いていると、ひざやふくらはぎあたりに水がかかつてきたり。靴についた水が、足を上げた時に飛んで、そのままひざにしぶつかつて来ている。

「何、これ？」

不快になつて来た俺は燕に聞いた。

「男の制服はズボンだからな。気が付かなかつたんだと思つ」この答えに、俺は納得した。

「女の子と歩き方もやつぱ違うんだね」

「確かに、小さな事が違うんだもんな」

青と赤の傘の中で、俺達は呟いた。

「猛、どうしたの？」

一人の男子が話しかける。教室で、俺は周りに注目されていたらし

い。

「猛さ、昨日制服汚れてその事で色々やつて疲れたみたい。しょうがない事だから、そつとしておいて」

なんで注目されていたか？それはその時、真ん中の列後ろから二番目の席の奴、つまり俺が寝ついていたからだ。

説明になるかは分からぬが、俺の体が変わる時は、基本寝る時である（最近は自分の意思で変わっているが）。そして俺は今日、女子制服で登校している。学校について疲れて寝てしまったら。つまりそういう事である。

そうして俺が眠っていた時に、一人の生徒がやって来た。

「このクラスに、女子生徒がいるそうじやないか！」

つまり、落ち着きました。 3ページ（後書き）

総合PVが15000、総合ユニークが2500！  
テスト期間だつてのに、泣けて来ました。

つまり、落ち着きました。 4ページ

朝のホームルームも始まつていないので、疲れた体を休める事なく、俺は叩き起こされた。

眠い目をこすり、周りを見ると、俺が起こされた原因であろう人物が目に付いた。

原因と思った理由は、中の上に入るであろうその顔が、見ているだけで腹が立つ笑顔をこちらに向けていたからである。

俺は立ち上がるとそいつの前に立つて - - -

「君かい？このクラスでおぶうつ！」

鉄拳を顔に叩きいた。殴られた男は、そのまま仰向けに吹っ飛ぶ。

「おいかか・・・猛！いきなり殴るなよ」

飾が言つた。倒された男は、周りに起こしてもらつている。

「なんかつい・・・」

俺は頭をかいた

「とりあえず、起きたんなら女になつとけ。変だから飾るに言われて俺ははつとした。それはやばいな。

「ええっと、大丈夫ですか？」

燕が俺が殴つた男に聞いた。男は相変わらず腹が立つ笑顔だ。

「大丈夫だよ。それより二人に、お願いがあるんだけど・・・」

男が笑顔のまま言つた。こいつが最初に言つた”このクラスに女子がいる”って言葉から、俺と燕に用があるようだ。

「お願い？」

「そうだ。君たち、美術部まで来てくれるかい？」

「嫌だ」

男が顔をあげたまま言つたのが気に食わなかつたので、俺は即答で答えた。すると燕が

「お前顔殴つちゃつたんだから、拒否するな」

なんて言つてきた。お前いつか後悔すんぞ。

ただ、殴つてしまつたことは事実で、殴つた理由も起こされたからでは、明らかにこぢらが悪い。

少し考えて、俺は言った。

「どうして美術部に行くんだ？教えてくれ」  
お願いを一瞬で拒否された事にダメージがあつたのか、男はしばらくボーッとしていたが、何回か声をかけると元気を取り戻して

「それは君たちにえのモデルになつてもらいたいからやー！」

拳をグツと握つて言った。

「えつ？ モデル？」

燕が驚いている。俺はさらに質問した。

「そのモデルつてのは、なんの絵のモデルだ？」

「申し遅れた。僕は佐久間修一だ」

俺の質問を無視し、この男、佐久間が言った。

「僕が君たちにお願いしたのは、今日の朝にビビーっときたからさ。雨がしんしんと降る中で、君たちを見つけた。僕は驚いたよ。傘を持つて雨の中を歩いているだけなのに、心に来るものがあつたんだから！ でも何か足りない。僕はそう思つた。そしてきずいたのさ！ あれでさらに手前にアジサイがあつたなら、素晴らしいものになると！ だがこの学校にはアジサイがない。けれど大丈夫！ 僕が所属している美術部の部員たちなら、君たちをモデルに最高の絵を描いてくれるから！」

非常にながらたるしい文章を語つてくれた佐久間少年は、そう言って俺らの腕を掴んで歩きだした。

「ふわっ！」

俺と燕は、突然引っ張られてよろけるが、佐久間少年はお構いなしだ。

まあ、あの話では、変なこともないだろうが。

どうでもいいが、俺と燕の腕をつかみ、強引に連れ歩いているこの佐久間少年に、鉄拳を「えてもいいのだろうか？」

つまり、落ち着きました。 4ページ（後書き）

実は「ゴールデンウイークと今回の話は、当初物語にありますんでした。

でも最初の形で進めると四月の後、七月に：

つまり、落ち着きました。 5ページ

引きずられる様にして、俺らは、美術部部室の前にきた。

「ちょっと待つておくれよ」

佐久間少年がそう言って部屋の中に入つて行った。

しばらくして、佐久間少年が部屋から出てきた。

「入つてくれ」

力が抜けた様な声で言つた。中で一体何があつたのだろうか。俺らが中に入つた。中は結構明るくて、清潔感があつて、それでいて何か落ち着くものがあつた。

そしてその中に、優しそうな顔をした人がいた。男の人なんだが、まとつてゐる雰囲気は母性的な物がある。ネクタイの色を見る限り、二年生だろうか？

「君たちが最近噂の女の子たちかい？」

優しい顔から発せられた声は、とても優しいものだった。これだけで、たいていの人なら心を許してしまいそうだ。

「しかしよく来てくれたね。佐久間君、すこしおかしなところがあるから」

少しをすつごく頭の中で変換して、俺はうなずいた。俺らの後ろで「芸術家は少しおかしいくらいがいいんだ」とか聞こえてるが、無視。

「僕は森山大地。<sup>もりやま だいち</sup>この美術部の部長だ」

森山さんが言つた。この人が部長なら、美術部員は幸せだろう。

「部長さんなんですか？！」

燕が驚いて聞いた。今日コイツ驚いてばつかな気がする。

「ああ、こんな僕だが、部長をさせてもらつていい。ところで、お願いの中身は知つてているのか？」

「あつ、はい。確か絵のモデルつて……」

「そうか、知つているなら話は早いね。放課後、美術室に来てくれ

るかい？」

森山さんがそう言つたのを聞いて、俺は朝のホームルームが始まる前だつた事を思い出した。

放課後、俺らは、言われたとうりに美術室に来ていた。俺と燕はモデルをするため、他の四人は冷やかしの為にいる。

朝と違つて、部室には結構な人がいて、俺の方を見てヒソヒソ言い合つたりしている。

「や、遅くなつた。悪いね」

ふと後ろから優しい声がしたと思つたら、森山さんがいた。

「森山部長。こんにちは」

あちこちから声が聞こえて、この人はやっぱ人望があるなと思った。

「それじや、えーっと…」

「あつ、かみかま神鎌かみかまたけ…かかりです」

「神鎌さん。あと…」

「山瀬 燕です」

「山瀬さん。傘を持つて、庭園のどこにいてくれるかい？ああ佐久間君。雨降つてるから道具を、後、篠田しのだも、準備を手伝つてくれ」テキパキ指示を出す森山さん。佐久間少年と篠田とよばれた人が、立ち上がりつて何やら大きなセットを持ち出す。

「手伝います」

冷やかしの連中も手伝いに行つた。

「俺らも庭園に行こう」

俺がそう言つと、燕は頷いた。

つまり、落ち着きました。 5ページ（後書き）

猛達以外のキャラ（先生達を除いて）実は作中で十一月頃にやっと登場する予定でした。

でも彼らだけでは、つまらなくなつてやうです。

次回。筆を取つて

お楽しみにー

## つまり、落ち着きました。 6ページ

清涼学園には、男子校にも関わらず、様々な設備がある。庭園ガーデンもその一つだ。

学園の一角にあるこの庭園は、生徒の憩いの場所として作られた。季節によって違う花が植えられていて、年間で三百種以上植えているとか。

まあ、花を見に来る生徒なんて、選択で理科を取つてる奴ぐらいだけだ。

「あの人達、凄いね」

「ああ、何してんだか分からぬけどな」

傘を持って、雨の中庭園の入り口に立つて森山さんを待つていた俺と燕は、雨に打たれながら、大きなセットを運んでいる美術部員と冷やかし四人を見ていた。セットの横で指示を出していた森山さんは、俺達に気がつくと

「やあ、待たせたね

と言つて来た。真顔で。

「大丈夫ですよ。ところで、あの大きな物はなんですか？」

俺は森山さんの後ろのセットを指さした。

「ああ、あれは画材が雨に濡れない様にする為の物さ

森山さんが答えると、今度は燕が言った。

「部員は思いつきり濡れでますけど…」

「大丈夫！ 素晴らしい絵が書けるなら、多少濡れたつて構わないさ

！」

笑顔で言つ森山さん。かつこいいな。

その後ろで和樹達が、俺等は構うと目線を送つてゐるが、無視だ。

「さあ、早く準備しよう。雨が上がつたらもつたといからね」

しばらくして、俺と燕の前に大きなセットが立てられた。はつきり言つてキャンプなどで使つタープで、その中に森山さんと美術部員が画材を組み立てている。

組み立て終えると、森山さんがこっちをみて、「ええと、こんな感じで傘を持つて」

と、ジェスチャーしながら言つた。俺は森山さんがした様に、傘を両手で持つ。肩に傘を当てながら、右手で支えて、左手は添える様に。

「そう。そんな感じで、向きはもうちょっと右向きだな……そう。そんな感じ。山瀬さんは、こいつって、それで神鎌さんの横に行つて。そこーそこに立つて」

森山さんの指示に従つて、俺等は動いた。

「神鎌さんは、こっちをみて、不思議な物を見る感じで、……うーん、少し首動かしてくれる? ……うん。それが良いな。そのままでいてね。山瀬さんは、神鎌さんの方を向いて、笑顔で、よしーじゃあ二人とも動かないでね」

まさか表情まで指摘されると、俺達が表情を勘でやつてると、満足した様にうなずいて絵を書き始める森山さん。その後ろでこっちをみて笑いを堪えてる飾達。正直、殴りたい。

そこから長い事俺と燕は動かなかつた。いや、動けなかつた。森山さんがいきいきと筆を走らせているのを見ると、動こうにも気が引けてしまつ。そんな光景を見続けて、雨が弱くなつたとき、

「出来たつ!」

森山さんが言つた。

よひやく、よひやく終わつた。

一つと息を吐き、体を動かす。あちこちの筋肉が固まつた気がする。

「凄く疲れたね。帰つてお風呂に入りたい」

燕の意見に俺は同意した。ただ立つてただけがこんなにも疲れるとはな。

「仕上げを終えたら、君達にも見せてあげるよ  
森山さんが笑顔で言つた。本当に満足行く物がかけたのだろう。そ  
の顔は輝いていた。

「これが完成した絵ですか？」

数日後、俺達は、美術室に来ていた。

「凄いなあ」

修が感心している。まあ、その気持ちは分かるな。この絵は凄い。  
雨が降つているなかで傘を差した女の子が一人。その子達の手前に  
あるアジサイが、大きく、美しく描かれている。  
なんだかこの絵を、ずっと見続けたくなつた。

つまり、落ち着きました。 6ページ（後書き）

読んでくれた方、読み続けてくれている方、お気に入りにしてくれた方、評価してくれた方、感想をくれた方に、世界規模の感謝を。

窓の外で、セミがとてもやかましくないでいる。何故そんなに元気なのかは知らないし、とても夏らしいのだが、うるさすぎる。しかし室内ではそんな事関係なく、俺等は学校の準備だ。まあ、準備なんてほとんどないがな。

「つし、今日を乗り切れば夏休みだ！」

空高く、明るく燃える太陽に向かって、学生は喜びの声をあげる。

「夏休みはやっぱ遊ぶだろ。海行こうぜ海」  
飾が鞄を振り回しながら言う。何も入つて無いかばんは、とても軽い。

「あぶねえな。でも海は良いな。なんてつたつて

「せつかく女子がいるんだもんな！」

飾と和樹がハモる。太陽にあてられておかしくなつたらしい。

「お前ら……まあ、海は良いな。他にも色々なとこ行つて、忙しく遊ぼうぜ」

忙しく遊ぶつてどんな意味だよ。優太。

まあ、せつかくの夏休みだしな。遊ばなきゃなんだ。

「宿題。終わつかな？」

そんなんか、修は宿題の事を考える。

「とにかく夏休みだ！どうすごすか、考えよつぜー」

俺達は腕を勢い良く突き上げた。

「やつぱつ夏と言つたら海だろ」

和樹が真顔で言つた。

「それと止だな」

優太も真顔で言う。

電車で田舎の方は行くまでのもありたな」と、二つゝこと頗る。」

「着つ」ゆかたてのま、泉二と駄つだつび

飾も真顔だ。本気で流行つていろいろじい。

「虫取りとかまたやりたいな」

しかし、燕は『』を細めて遠くを見る『』で言つた、これが限度か、アイディアは、結構出る物だ。次にこれを、いつ行うかを決めなくてはならない。

「じゃあいつ行くかだな」

「山は普通二ヶ月でござる」「せ、ソーラー

「お祭りが近いの最後一回

「虫取りは止のついでに」

「旅行は断念つて事でいいうか」

などと会議をして、ついでに、

どいの山に行くか、どの位行くかなどが決まっていく。

「海はいい電車使ったあそびで後一泊するこれでいいな?」

夏休み第一回レクリエーションは、海にいく事になった。

つまり、…………夏か 1ページ（後書き）

今回は短くなってしまった。  
書くのはほんと難しい。  
さあ次回は、海ですよ?  
おたのしみに

電車の中から見る景色は、町の中で、大きなショッピングモールがあつたり、散歩しているひどがいたり、中々に面白い。ガタンゴトんと揺れるリズムが、座つていると心地よい。車内に人は結構いるが、今が休みだからだろう。エアコンのおかげで暑くないので、とてもいい気分だ。

「おつ！ おいほらお前ら！ 見えたぞ。海だ！」

優太が外を指差す、建物の奥の方に、海が見えて来た。

「おおつ！」

思わず声が漏れた。

海に太陽の光が反射して、眩しい。俺達は、窓に近いて、海を見ていた。

駅について、ホテルに行つて、色々と用事を済ませた俺達の目の前に、綺麗な海がある。

「なあ」

そんな時でも、こいつらの思考はいつもと同じだ。

「なんでお前、男なんだよ？」

こんな風にな。

「前夜祭とか言つて徹夜したからだろ？ 明日には変われる様になるけど、今日は諦めろ」

俺は笑顔でそう言った。がつくり肩を落とす和樹。俺は言葉を続けた。

「それに、62つて言われた俺なんかより、78のあいつの方が目に良いだろ？ なつその力ノジヨ」

そう言つて俺は少し離れたところにいる燕を見た。パラソルの下で日焼け止めを塗っている燕は、少し恥ずかしそうにこちらを睨んでいる。

「どこのキャラ男だよ  
修が後ろで呟いた。

「お前らいつまで浜辺にいるつもりだ？さつと泳ぎに行くぞ」  
声のした方を見ると、優太が立っていた。と思つたら、優太はそのまま修と飾の腕を掴み、海に一直線に走つていった。俺等は笑つて後を追つた。

海はやはり、とても楽しい。

気がついたら、夕方になつていた。

俺達はホテルに戻り、落ち着いている。

部屋は二つ取つているが、俺達は今一つの部屋に集まつている。  
流石は私立に四年も通つている家柄だよな。ホテルで割り勘とは言え部屋を二つ取るのだから。

「海、明日も泳がないと

そんな事を燕が呟いた。

「せつかく海に来たのに泳がないとか、そんなもつたいたい事はしたくないな」

俺も賛同した。今日泳いでいるが、それが明日泳がない理由にはしない。

「じゃあ明日は岩場の方に行こうぜ」

飾が言った。視線は手に持つてゐるものに集中していて、なにか考えている。

「そういう洞窟みたいに穴空いてたな、あそここの岩場。つとウノだ」

「はいドロー2

「大丈夫、俺は持つてたからな

「ドロー2

「続くね、ドロー2

「よかつた持つてたよ。ドロー2

「.....」

固まる優太。

「どした？早く十枚引けよ

ウノを宣言した直後に、誰よりもカード数が多くなつて、ダメージを受けた様だ。少し放心状態になつてゐる。

その後、カードを順調に減らして、俺は三位とまた微妙な順位で終わつた。

因みにビリは修で、本人は納得いかずに再戦を希望した。

「続きは風呂の後な」

そうして俺達は、高らかに笑いながら部屋を出た。

夜はこうして更けて行く。

つまり、……………夏か 2ページ（後書き）

第一回レクリエーションはつとか言って起きながらポンポン飛ばす  
から人気落ちたのかな  
……………反省。

朝目が覚めれば、それはいつもと変わらない朝で、セリの大合唱が夏らしいBGMとして聞こえる。朝日がとても眩しく、時計を見るとまだ六時頃で、起きよつか一度寝しよつか悩んでしまつ。とりあえず皆が起きるまでじつとしてよつかと考えていた時だつた。

「か～かりちゃん。つ～ばめちゃん。お～きー～。」

…………近所の小学生だらうか？

「俺は小学生じゃないぞ～？」

なんだ？俺はテレパシーを使つた覚えはないぞ？俺は声を無視する事にした。

「起きなきやピッキングしてお前らの寝顔にチュウするぞ～」

この言葉で俺は勢いよく跳ね起き、玄関に向かつた。そして玄関にいた燕と共に扉を開け、そこにいた顔に一人で拳を叩き込んだ。

「何するつもりだー！」の阿呆？」「

「全く、今日はお前らの浴衣を買いに行くつて言つてたじやねえか」

頭をかく修。その横で、完全に伸びてゐる和樹。

「あんな言葉を言われたら、思わず…ねえ？」

燕が顔を下に向けつつ言つた。

俺も賛同する。男子校とは言え、あんな言葉を玄関の前で堂々言つなつてもんだ。

「まあいい、とりあえず、九時に出かけるから、それまでに準備しておけよ。あとかかり、お前の服を買いに行くんだから、男になるなよ

「おー」「おー

そつ言つて修は、和樹を引きずつて部屋をでて行った。

「…とりあえず、飯を作るか…。燕、お前シャワー浴びて来いよ、寝癖やばいし

「え?…ああ、そつする」

そつ言つて燕は風呂場へと消えてつた。

俺は朝飯を作り始めた。朝飯は適当にい飯と味噌汁。シンプルな朝飯だ。

一応ここで説明。

今現在俺達は清涼学園の寮にいる。

海から帰つて来て十日ぐらい経つたから、いまは七月の終わり。この後、学園主催の文化祭とは違つお祭りが開かれる。学園祭は生徒が出しものを出すが、このお祭りは、近所のお店や住民の方が屋台などを出す。今日はこの後、お祭りで着る浴衣を買いに行くことになつてている。

俺が味噌汁がうまくで来たかどうか、味見をしようとした時だった。

「……かかり

風呂場に入つてから何もしてないような気がしていた燕が、風呂場から声をかけて來た。

「ん?」「

味見をしながら返事をする。すると

「なんか生理になつたみたい

「ぶつ!」「

爆弾発言が降つて來た。

つまり、……………夏か 3ページ（後書き）

テストが終わった開放感！  
ゲームをクリアした達成感！  
自然と溢れる満足感！  
気持ちがいい！

燕の言葉に、思わず味噌汁を吹いてしまった。慌てて口をぬぐい、燕に聞く

「えへっと、何になつたつて？」

俺は風呂場の方に目をやらながら聞いた。

「……だから……生理」

風呂場から声が帰ってくる。

俺はまだ事態を収集し切れていなーいが、指示を出した。

「とりあえず、上がれ」

そう言つた後、俺は携帯を取り出し、相手が電話に出たのを確認してから言つた。

「緊急事態発生」

今現在俺達は、寮の一室にいる。

「緊急事態つて…確かにそうだが…」

集まつた俺達は、先程起こつた緊急事態について話している。

「でもこいつは女になつて一ヶ月経つてんぞ。何で今さう…」

飾が不思議そうに言つた。確かに、燕が女になつたのはゴールデン  
ウイークの少し前だから、今更つて感じだな。

「とにかくこの現状を何とかしないと」

優太が言つ。しかし、男子校に寮暮しの俺達は、何一つ解決策が浮かばない。

「かかり、お前は今まで生理とか無かつたのか？」

「無いよ」

和樹が俺に振つて来たのを流した時、ふと俺は解決策が浮かんだ。

「そうだ…高梨先生だ！」

思い出そう。高梨先生は、四月に女になつてすぐの頃、身体測定をしてくれた理科の先生だ。男子校にいる話し掛けやすい女性。おばさん先生じゃないから、相談するのにピッタリである。

「おおっ！確かにそれが良いな。この時期なら祭りの事で多分学校にいるだろうしな」

そうして俺達は、浴衣を買うのを延期して、学校に向かつた。

「だからと言つて、六人でくる事無いでしょ？」

高梨先生は呆れた顔をして言つた。俺達は、高梨先生に相談しに来たのだ。

「まあいいわ、とりあえず燕さん。ここに残つてね。他の人たちが、えーっと山田先生ーーーこの子達に祭りの準備を手伝わせてあげて下さい

……ついてこなきや良かつた。

燕以外の俺らは、山田先生に そうか手伝ってくれるのか と

感心されながら、引きずられて行つた。

「そこにテントを建ててくれ」

山田先生に指示されて、俺達は鉄の棒を持ち上げる。祭りの準備を生徒が手伝うなんて事が今まで無かつたのか、力仕事が俺達にまわつてくる。周囲も組み立てている最中で、結構騒がしい。

「ふう……やっぱまだ準備中だな。組み立てかけの屋台とかがあちこちにある」

教員が使うテントを建て終え、周りを見ながら優太が言つた。

「ホントだ、…あつでもあそこは完成してるよ」

「」の祭りって、やぐら建てる意味あんのかね？

なんて雑談を楽しんでいると、

「神鎌。高梨先生が呼んでたぞ」

後ろに小鳥遊先生がいた。小鳥遊先生は俺を見て、

「家庭科室で待っているそうだ」

と言った。俺は和樹達にその事を言って、小鳥遊先生にお礼をいい。校舎のなかに入つて行つた。

家庭科室に向かいながら、俺はどうして呼ばれたのだろうと考えた。生理についてなら、さつき燕と一緒に話を聞いている筈だ。それに家庭科室でと言うのは何故だろうか。

家庭科室の前についた俺は、少し息を整える様にして扉を開いた。

「失礼します。先生——」

俺は言葉が止まつた。家庭科室には高梨先生がいた。そして先生の横にどこにあつたのか、浴衣を着て恥ずかしそうにこちらを向いている燕がいた。

「……………」  
俺が固まっていると、燕は恥ずかしそうに俯いて  
「変じやないか？」  
と言つてきた。

「いや、……驚く程似合つてゐる」

燕が着ている浴衣は、深い黒の色の生地に、赤いラインが走つている。それでいて振袖のトコに白も入つてゐるから、まんま燕だ。

「これどこにあつたんだよ？」

俺が聞くと、高梨先生が答えた。

「それね、なんでかこの学校にあつたやつなの。さあ、貴女のもあるから着てみましょ。ちよつと待つてね」

そつと音で奥の部屋に消える高梨先生。なんでかこの学校にあつたやつって、不気味じやね？ そう思つてゐると、燕が耳打ちして來た。

「高梨先生少し怖くなつた

どーでもいい報告だ。

そつしてると高梨先生が布を持って帰つてきた。

「さあ、試着するから、着てる物全部脱ぎなさい。」

「は？」

俺は固まつた。

「え？ 先生なんて？」

「着てる物全部脱いでつて言つたの。浴衣は素肌の上に着るものだから。さあ、自分で脱げないなら……身ぐるみ剥ぐ事になるわよ」  
そう言つやになや、先生は俺の制服（念の為に言つが、今は女だ）  
に手をかけた。

「あの……先生？ 何を……」

「せいっ！」

「？」

「測定の時も思つたけど、やつぱりね」

「服！服を！」

「あ、ごめん。つと」

「？、え？え？」

「やつぱり可愛いわあ」

本の数秒で、俺は浴衣に着替えていた。高梨先生の変な特技を知つたな。確かに怖いや…。

俺が着ている浴衣は、よくある紺の生地に綺麗な花が描かれている物だ。

「……燕、どう？」

高梨先生の後ろに薔薇が見えた気がしたので、俺は燕に聞いた。

「うん。凄い似合つてる」

燕は笑顔で言つた。……なんか恥ずかしいな。

「…………照れてる？」

「なつ！」

「照れてるのか、可愛いよ～似合つてるよ～」

「やめい！恥ずかしい」

「顔赤らめちゃつてまあ」

俺達が妙にきやぴつてる、高梨先生が俺達に向かつて言つた。

「一人ともお祭りに出るんでしょう？その浴衣あげるわ」

「え？」

俺達は固まつた。この浴衣、学校の物じゃなかつたか？

「貰つても大丈夫なんですか？」

燕が言つたが、今の言葉は貰いに行つてる気がした。

「大丈夫よ。倉庫から出て来た物だし、ここは男子校だから、着る人いなもの。遠慮なく貰つて頂戴」

そう言つて微笑む高梨先生に向かつて

「「ありがとうございます！」」

俺達は頭を下げた。高梨先生はまだやる事があるでしょうと言つた。

俺達が首を傾げると、先生は笑つて言つた。

「じゃあ、着付けを覚えてね」

つまり、……………夏か 5ページ（後書き）

三十話めです！  
思えば投稿し始めてもうそろそろ一ヶ月。  
なんか嬉しいです！

「 「 「 「 …… 「 「 「 「

「なんだよ、ボケーっとしちゃって」  
祭りの日、飾達の所に遅れた俺と燕は、息を整えながら聞いた。  
一同、固まつて動かない。ポカンと口を開けている。人形か。

「まさかここまでとはな」

和樹がしみじみ言つ。おっさんか。

「でもスゲーカワイイよ。似合つてる似合つてる」

飾が調子良く言つ。チャラ男か。

「いや、やつぱこんな美少女と回れるつて俺らついてるな

「ついてるなつて、友達だろうに」

優太が呆れた声を出す。まつたくだ。

「とにかく祭りに行こつ。今年は花火もやるみたいだし」

俺がそう言つたので、俺達は会場である時計広場に向かう。

「やつぱり歩きずらいな」

歩きながら、俺はぼやいた。すると横にいた修が

「しようがないだろ？ 浴衣なんだし。それにその方が綺麗だからな」と言つて来た。カツコカツコとぼつくりの音をたてながら歩く俺。

「小股になるのも歩きづらい理由の一つだけど、何より下着を着な

いつてのが落ち着かない」

俺は髪を弄りながら言つた。そつかと短く答えが返つてくる。修を見ると、普通の顔だ。

全く、からかいがいがない奴だ。

そうしているうちに時計塔広場に付いた。

「やつぱりスゲーよな。これは」

優太が感心している。でもこの祭りは確かに学校で行つてベルじゃないしな。俺も頷いた。

祭り会場は賑やかで、夜店が立ち並ぶ。中等部や大学部の生徒もい

るので、かなり混んでいた。俺達は祭りを楽しもうと、夜店を見て  
いる。

「くじ引きやつしるべ」

飾が屋台を指差して言った。田を向けると、中等部の子達がくじを  
引いている。ゲーム機を狙っている様だ。

俺はハズレ商品を眺めて言った。

「やめよ。ハズレた時に嬉しくない

「もうちょっと良いトコあると思うぜ」

和樹も言った。一人に否定されて黙り込む飾。

「ねえ、ヨーヨーすべしよつ

ふいに燕が言つて来た。俺は燕に向かって

「すぐった後ヨーヨーって邪魔じやない？」

と言つて流そうとした。しかし

「夏らしいからいいじゃん。ほらこぐや

と言つて俺の腕を引っ張る燕。お前、今までの買ひ時、役立つか  
どうかとか考えてから買つてたじやんか。夏らしいから…どう  
した燕？

「おっちゃん。一回分

そつ言つて小銭を渡す燕。まあいか。俺もおっちゃんから道具を  
貰つた。

「やつぱ暑いなあ

せつかくの祭りにこの言葉は興醒めだ。俺は綿菓子を食らいながら思つた。

横にいる燕は、飴細工で作られた蝶を食べている。和樹は焼きそばパックを大量に買い込んでいるし、修は射的で取つたトランプとゲーム機を持ちながらポップコーンを持っていて、飾はチョコバナナとかお好み焼きとか、食べ物類を買つていた。優太の手には焼き鳥だ。

「見事に食べ物ばかりだなあ」

綿菓子をつまみながら俺は言った。と、飾が、

「この後花火だろ？少し離れて見るから買つといったんだよ」と言った。しかしこの量は多過ぎるだろ……

ふと見ると、手元の綿菓子が無くなつていた。

「なあ、花火が始まるのって、何時だ？」

花火が始まる前に、もう一本、綿菓子を買つておこう。

すみません！

昨日同じ話を一回投稿していました。  
三十話はひきりでした。

## つまりは文化祭！ 1ページ

夏休みが明け、ガヤガヤと騒がしい清涼学園。なんせ一学期最初のイベント。文化祭が近づいているからである。生徒一丸となつて取り組むこのイベントは、どこの高校でも盛り上がっているのだろう。——さて、少しばかり、回想に入るとしてよ。なあに、ほんの二ヶ月程前に——

文化祭が行われるのが、一学期始まつてすぐだと、一学期、六月頃からどの出し物をやるとか、そんな事を決め始める。

「はい。それでは文化祭の出し物について、何か意見あるか？」文化祭実行委員に、つこさつき決められた加藤誠吾<sup>かとう せいご</sup>は、クラスメイトに向かって言つた。俺は珍しく起きている。

「はい」

後ろの方の席から声が上がつた。真面目な意見を言つ奴じゃない様だが、

「高田<sup>たかだ</sup>か。何したいんだ？」

クラスのお調子者だから多分却下されるだろ? そんな事を考えながら高田の言つ事も上の空で聞いていた。

「やっぱりメイド喫茶がいいです」

……やはりな。

「俺も賛成します！」

和樹、賛成するな。だが、俺は甘かった様だ。ここは男子校であり、クラスには普通男子しかいないはずなのだ。

「俺も賛成します！」

和樹が最初に便乗して、じゃあ自分もと言つ奴が出て來た。

「ちょっとまた！ なんでメイド？」

燕が慌てて立ち上がり、否定するが、

「クラスに女子がいるんだぞ！」

と、クラスメイトの反発にあつて黙つてしまつた。かと言つて俺も黙つていたら、あんなフリフリした物を着なきやいけなくなる。俺は立ち上がつて、教室の前に行つた。加藤に教卓の前を開けてもらひ、俺は言つた。

「クラスに女子が一人しかいないのに、どうやつて成り立たせるんだよ」

教室中の目線が俺に集まつた。

「たつた一人で喫茶店やるのは無理がある。そんな事をすれば、当日俺と燕は回れないだろ？」

とにかく理由を確立させる。で、確かにと頷かせる。いつすれば納得してくれるからな。

「確かに、二人に一日間働かせる訳にはいかないし……」

ふう……これで落ち着いたな。しかし、一度燃え上がつた男子は、結構しぶとかつた。

「じゃあ劇だ！ 劇をやろう。これなら一人でもできるだろ？ し、最悪三人にして一人ギヤグでやれば問題無いはずだ」

納得出来る意見を飛ばして來た。糞、こいつ等どうじても「女子がいる事」と言う事を使いたいらしい。

劇と言うのは普通面倒がる物だが、俺が反論出来ないでいると、こ

こぞとばかりに押して來た。

「劇なら良いだろ！」

「そうだ。これで当日も回れるじゃねえか」

迫つて来る男子たちに、俺は頷いていた。

## つまりは文化祭！ 2ページ

次の日、

文化祭で劇をやる事になつた俺のクラスは、多分他のどのクラスよりもやる気に満ち溢れている。

「では、どの様な内容にするか話し合つぞ」

加藤が声を張り上げる。おおーっ！ と盛り上がるクラス。盛り上がり切れない俺と燕。

「女子が一人しか出でこないから、結構難しいな」

まともな意見が出た。登場人物に女子一人は、物語として成り立つのだろうか？……まあ、男子が一人しか出でこない物語もあるから大丈夫か。

「男子が女子になつちゃつた話は？」

「それ俺のリアルライフ」

ベターで一人しか女子がいなくても大丈夫だが、俺が今その状況だ。

「うーん、どんな話にしようか」

思つたより物語に作るのは難しいな。三人よれば文殊の知恵とか言うが、何人いても出でこないぞ。それでも内容を考えるのは執念なんだろうなもう。

「とりあえずみんな考えついたら持つて来てくれ。その中から選ぼう」

今悩んでも出て来る事は無いと思ったのだろう。加藤が言った。

その日の話し合いは、これで終了した。

「成る程、劇か……これは文化祭大賞今年は決まった様なモンだな」  
優太があごに手を当てながら言った。今居るのは寮の一室だ。

清涼学園の文化祭、水連祭は、毎年学園で最も人気だつたクラスに文化祭大賞を与える事になつてゐる。この賞を取つたクラスには、何故か豪華賞品がでる。賞品は毎年その時の校長先生がくれるのだ。

「女子がいるつてのは強いな」

修も頷く。まあ、高等部と大学部の生徒だけですごい事になるしな。「でもまだ劇の内容が決まってないんだよな」

燕がため息を吐く。女子がいるだけでかなり人気を集めるだろうが、劇の内容が悪かつたら保護者人気で負ける。

「お前らは何をする事にしたんだ?」

俺は三人に聞いた。燕と飾は同じクラスだからな。

「俺んとこは超縁日とか言つやつ。はつきり言つて微妙かな」  
修が笑つて答えた。

「俺は焼きそば屋さん」

和樹が答える。

「お化け屋敷」

優太は疲れたように言つた。俺は少し気になつた。

「優太どうした? 元気ないな」

俺がそうきくと、優太は足を投げだしながら言つた。

「文化祭実行委員なんだよ、俺。なのにまとまらなさすぎて疲れるつ!」

優太が文化祭実行委員……これは手強い。

「猛、劇の練習とかつて決まつてんのか?」

燕が聞いて来た。暑いのか髪を上に結び上げてゐる。

「練習も何も内容がまだだる。一週間後位にはきまつてゐるさ

俺は呑気に答えた。

## つまりは文化祭！ 2ページ（後書き）

総合ユニークは40000を超え、アクセスは26000を抜いた。  
やつぶあいすぐ嬉しい。

## つまりは文化祭！ 3ページ

「劇の内容が決まつたぞ！」

実行委員の加藤が高らかに宣言したのは、劇をやると決めた五日後のことだつた。

「そうか、勿体<sup>もったい</sup>ぶらずに教えてくれ」

クラスの誰かが笑顔のまま動かない加藤に向かつて言つた。

「おおそだな。じゃあ大まかな内容が書かれた紙を配るから、それで確認してくれ」

そう言つて紙を配る加藤。俺は回つて来た紙をとりあえずの体<sup>てい</sup>で眺めた。

「主人公の女の子はある時異世界に行つてしまつ。そこは荒れ果てた森が広がつていて、生命の気配が感じられなかつた。女の子がしばらく歩いていると、騎士の格好をした人達に囲まれる。

「ここで何をしている？」

騎士の一人が問いかけたが、女の子は答える事が出来ない。女の子はそのまま城に連れていかれた。

城について、王様の前に連れていかれた女の子は、王様の言葉で死刑を宣告される。

連れて行かれそうになつた時、突然侵入者が現れて女の子を救出した！

城から出る事が出来た女の子は、自分を助けてくれた男から『歌姫』として異世界にやつて来た事を知る。

歌姫の歌は、再び世界に命を与える。女の子は、命の歌を世界に響かせる事になつた。

しかし、ただ歌うだけでは世界に届かない。世界に響かせる舞台に、なんと城から歌う事になつた！王様、騎士、城の人間は女の

子を捕らえようとする。女の子と男は城の警備をかいぐぐり、バルコニーから歌を歌つた。

するとその歌声は世界を巡り、命が広がつていつた。

こうして異世界を救つた女の子は英雄としてもてはやされるが、女の子は元の世界に戻りたいと考え、男にその方法を教えてもらつた。

元の世界に戻つた女の子は、また静かに日常を過ぐして行く。」

……どこが大まかにまとめたんだよ。

紙に長々と書かれた文章を読んで、思ったことがこれだ。だが俺の周りの奴らは真剣に読んでいた様で、次々と意見がで始めた。

「これって大道具とか難しくね？ 教室だとしまつ場所もないし……」

「これを実際にやるとしたら、結構時間かかるな。三十分位になりそうだ」

「この設定からセリフとか広げていくから、脚本を考えていかないとな」

遅しいな。放つて置いても素晴らしい劇になりそうだ。

「とりあえず脚本を完成させないと、実行委員とクラス委員とあと数人選んで話し合つよ」

飾が大声で言つた。この言葉にクラスは納得して、脚本作りの人を決めた。その中に飾かわ発案者として入つていたが気にしないで行く。

つまりは文化祭！ 3ページ（後書き）

筋肉痛が二日間取れません。  
体鍛えなきゃ

「どうしてこの草木はこんなにも枯れているの？」  
そう言つて、空中に手を伸ばす。

「この花も、とても綺麗な花を咲かせていたはずだわ」  
慈しむ様に花に顔を近づける。その時、

「誰か居るのか？」

ふいに後ろから声がする。振り返ると――

「ぶつ！」

「笑うなよ！」

「だつたらそのへんなキメ顔やめる！」

劇の台本も出来、誰がどの役をやるかも決まり、いよいよ練習に入つた我が一年四組。

今は台本を読みながら一通り流しているのだが、騎士役の宮田の妙なキメ顔で思わず俺は笑つてしまつたのだ。

「かかりい、お前言葉遣い。普段も女口調でつて言つたじゃんかよ」「るつさいな。通してる時は出来てんだから良いじゃねえか。それに、女口調に慣れ過ぎると男の時でも女口調で喋りかねないからな」俺は右手をひらひらさせながら言つた。

「まあいい、じゃあ今やつたグループはセット作りに移つて、セット作つてるグループは通しをやるよ」

加藤が指示を飛ばす。俺らは元気良く返事をして燕達と交代した。

「水連祭は九月だからな。練習時間短いからしつかりと練習しきよ」そんな声を聞きつつ、俺は絵の具で木を描いてく。上手くは無いが、後ろの方にちょこんと飾つておけば良いだろう。

作業をしていると、廊下から、俺たちとも、燕達とも違つギャグパートグループが飛び込んで来た。

「服のデザインこんなんはどうだ？」

息を切らしながら服のデザインが書かれた紙を出すギャグパートグ

ループ。クラスにいた人達は、作業をやめ、紙を覗き込んだ。

「この服……ヤバくね？」

その紙に書かれた服を見て、俺は絶句した。

それは、どう考へてもやり過ぎと思えるデザインだった。……男つて、馬鹿だね。

「いや大丈夫だろ」

周りの男子達は言つ。俺は溜息をついて、声を低くして言つた。

「こんな服で劇をしたら、トラウマが来るだろ」

言つた瞬間、男子達の顔がみるみる青くなつていく。

さてこのトラウマとは、清涼学園に「」へ最近から伝わるもので、なんでも先代校長が、

「優しさあふれる人であれ」

つて人だつたらしい。その結果、清涼学園には謎と言える独自の格闘技があつて、街中にいる不良ならあつとこう間に飛ばせる。だがその格闘技を使ってやましい事をすると、先生方からトラウマを植え付けられる。らしい。

そのトラウマがどんなのかは知らないが、植え付けられた先輩はその後、日常生活ですらまともに過ごせなくなつたと言つ。

……今回は文化祭だし、まあ普通はお咎めなしだが、こんな大胆な服は着たく無いので少し脅しをかけた。

その田舎つと、男子達の顔が青くなつっていたので、俺は心の中で謝罪した。

## つまりは文化祭！ 5ページ

どんな劇だらうと主役を貰うと、セリフを覚える量が多い。主役であまり喋らないのは、ゲームの主人公位だらう。つまりどういふ、この前置きの意味は――

「疲れた！」

その声とともに中を舞う台本。俺はソファにもたれ、天井を見つめた。別に天井を見つめて何があると訳じやないが、とにかく台本から目を逸らしたかった。

「私の歌で世界が救えるの？」

キツチンから声が聞こえる。燕が多分、料理しながら台本を読んで練習しているのだろう。俺は燕の声を聞きながら、ソファの上で横になる

ほんの数日前に美術部に駆り出され、普段の授業と文化祭とで疲れた俺の頭では、寮に戻つてまで台本を読む気になれなかつた。今俺の頭は、糖分を求めてる。

「確かに私はこの世界になんの思い入れもないけれど、あんなに荒れた景色を見たら、何もしないでかえれ……つてああっ！」

キツチンからあわただしい音がする。

「どうした燕？」

俺はソファに寝転がつたまま聞いた。

「…………焦がしちやつた……」

申し訳なさそうな声が返つてくる。俺は寝返りを打つて

「いいよー別に。それよりメニューなあに？」

と言った。別にメニューなんてどうでもよかつたが、何か話さないと燕が謝つてきそつだつたのだ。

「メニュー？ ただのフライだけど・・・」

「ふうん

生返事を返しながら俺は、なんのフライが焦げてしまったのか気になつた。

「授業がよつやく終わつたか」

俺がため息をついたのは、帰りのホームルームが終えた時だ。この後にある文化祭練習の為に、俺は女子制服の入つた袋を持ち上げた。さすがに男のまま女口調でしゃべる氣は無い。

「猛。お前劇の練習で必ず女になるんだから、最初から女でいればいいじゃねえか」

席を立とつとすると、飾にそつ言われた。俺はそのまま立ち上がりて言った。

「飾。女でいたら体育参加出来ねえじやんか。」

今日の練習は外でやるらしい。なぜかといつて、背景に使う絵を描くために、人が大勢いると邪魔なんだそうだ。しかし、いくら六月の終わり七月の初めといえど、もう夏であり日差しが強い。そこにい昨日まで降つていた雨の湿気が追い打ちをかけるように俺たちのやる気を奪つていった。

その環境に全員耐えられず、木陰で休んでいると、背景を書いているはずの生徒が何かを持って走つてきた。

「えーっとかかりと燕。お前らが歌う歌ができたから、教室に来い

歌とは、多分台本に書いてあつた命の歌とかいうやつだろう。  
・  
・  
・  
しかし歌が出来たか。どこから引用すればいいのに、この  
クラスは自分たちで作つちましたか。  
とりあえず、俺は立ち上がり、燕と一緒に教室に向かつた。

## つまりは文化祭！ 6ページ

———— セテ、

この後も長々と練習風景を描いたつてつまりはないだろう。実際ただの日常風景を描いていくのとおんなじだ。登場人物がおかしい性格の人たちならそれでも楽しいのだろうが、ここにはそんな人はいない。従つて、夏休みを全て素つ飛ばすことにする！

てなわけで、二学期の頭。

教室はもうすぐそこまで迫つた水連祭に向けて熱気が溢れている。燃えているのは学園全体なんだが。なんせ中等部から大学部まであるもんだから当然一日で回れる訳がない。従つて、水連祭は保護者観覧が一日、生徒のみの日が一日、計二日行つ。

「もう文化祭はすぐそこだ！ 緊張で今まで練習して来た事をわすれるなよ！」

加藤の声も力が入つていて。おおっ！ と盛り上がるクラス。

「今日は放課後。みんな倉庫のところに行く事！」

加藤がそう言つた瞬間、教室中についた熱気が一気に冷めた。みんなが考えている事が手に取る様に分かる。なんで倉庫のところに行かなくちゃいけないと。

そう思いつつも、始業の鐘が鳴つたので、俺らは授業の準備に移つた。

放課後。

言われた通り倉庫の前に来た俺たちに、加藤は笑顔で待つていて、それを見た俺たちは、全員回れ右をして今来た道を引き返した。

「ちょ、ちょっと待つた！この倉庫の中にあるのは劇で使う衣装だ！」

その言葉で、引き返す足は全員止まる。そして倉庫へと突進して行つた。

「どれどれー！」

「うわっ！この騎士の服かっけえ！」

「この男の格好も良いな」

「おい！女の子の衣装だ！」

「なにい？早く燕かかかりに着せるんだ！」

最後の言葉は何と言つた？

このたつた一瞬の現実逃避をしていたせいで、俺は気が付くとクラスの連中に囲まれていた。不敵な笑みを浮かべながら近づいて来る連中。と、ドンと何かが背中に当たつた。振り返ると燕がいる。顔が青くなつていたが、落ち着け、これは衣装合わせだ。その時俺はある事を思いつき、顔を上げて前を向いた。

そして、少し腰を落とし、両手を口元に持つて行き、大きく息を吸つて――――

――キヤアアアアアアア――――

できる限りの悲鳴を上げた。

すぐ後に後ろからドタバタと音がして、他クラスの連中がやつて來た。

「なんだ今のは悲鳴は！」

「お前ら学園の花になんて事を…」

「む、俺らは衣装合わせを…」

田の前で始まる乱闘。普通に受け取れば良かったのだが、

あいこち、しらねつ…

つまりは文化祭！ フページ（前書き）

気が向いたらで良いので感想等を書いてくれたら嬉しいです

## つまりは文化祭！ フページ

どこもかしこも騒がしい。

廊下を歩けば肩がぶつかり、立ち止まれば密引きに出会い。廊下にはスタンプラーのクラスだらうか、酷い格好もある。

そんな物を横目に、俺は掲示板の前で突っ立っていた。さて、何をしよう。

文化祭当日、俺は無計画でいたため、楽しむどころか暇になっていた。なので掲示板の前で面白そうなクラスを探しているのだが、これと云つて面白そうな物がなく、困っていた。

一体何をしよう。そう思つて掲示板を眺めていると、俺らのように劇をやつているクラスを見つけた。俺は暇つぶしになればいいなとそのクラスに行くことにした。場所は一年一組だ。

一組の前につくと、人が少なかつた。遠目に見える俺らのクラスでも、結構人がいるのに。

「中、はいれますか？」

俺は受付の人にそう言つて中に入つて行つた。中にはさすがに人がいたが、席がまばらだ。俺は適当にあいていた席に座る。劇の内容はどうやら有名なおとぎ話で、面白いとは言えないが、俺はボーッと見ていた。

劇が終わり、再び暇になつた俺は、ただなんとなあく四組の前に来た。並んでいる客は、ほとんどが学園の生徒だ。その中に、人気があるのだろうかと足を止めたらしい保護者の方々がいた。

「猛、どうした？」

受付をやつていた奴が話しかけて来た。

「ああ、暇でな」

俺は適当に返した。周りはお祭り騒ぎで盛り上がりがついているのに、マイチ楽しめない。俺はフーッと溜息をついた。時計を見ると、一時五十分だつた。俺の担当は十一時からだから、ここで待つてゐる

か。

壁にもたれていると、中から笑い声が聞こえる。今やっているのは全員男のギャグパーティー。

「お、猛。もうこるのか」  
声がした方をみると、そこには、同じ十一時から劇をやるメンバーがいた。

「この後交代だからな。もう中で待つよつぜ」

「よく一教室をこんな豪華な感じにしたよな」

舞台の袖から教室見て、俺は感嘆の声を上げた。ギャグパーティーだと、いつの間に、この人気。すでに客席は満員だ。

劇はもう最後で、男に女の子が元の世界に返してもらつといだ。

「かかり、じつちこい。円陣やるぞ」

客席から拍手が沸き上がった時、後ろから声をかけられた。振り返ると、メンバーが輪を作っていた。俺は頷き、皆と肩を組んだ。

「大賞を取れる様に、しつかり行くぞー！」

「おお！」

円陣をほどき、じょじょ俺の出番だ。

俺は深呼吸をして、舞台の上に駆け上がった。

## つまり、他校交流会？ 1ページ

十月は「ぐるぐる」普通に過ぎ去って行った。テストに追われ、衣替えをして、ハロウィンをする事無く、十月は平凡に普通に何事も無く平和だった。だが周りの男子達のテンションは日に日に高くなつていった。制服をオシャレに着こなそうとしていたり、普段何もしていないのにワニクスで頭を固めたり、ソワソワしつ放しだ。まあこれも、仕方の無い事なのだろう。何故なら、この後にあるのは一学期最大の重要なイベント。温華女学院との、交流会があるのであるから。

「俺はこの時をずっと待つていた」

真面目な顔をして和樹が言った。因みにこの交流会は高校からなちゅうとうぶで、中等部を男子のみで過ごして来た連中が思い上がらない訳がない。

「待つていたつてなあ。俺は知らない人と話せる位にしか思わないな」

俺は椅子にもたれ掛かりながら言った。

「ハン！お前はそんな心意氣で女学院のお嬢様方を落とせると思つてゐるのか？しつかり狙いを定めてだなあ」

「そんな心意氣で行つたら引かれそうだな」

熱弁する和樹にそう言つて、俺はクラスを見渡した。もう十一月なのに、なんか暑い。

「皆楽しそうだね」

燕が笑いながら言った。

「お前は楽しみじゃないのか？」

優太が疑問に思つたのか、燕にきいていた。

「ああ。先生に止められて、なんでも男子校なのに女子がいると問題になるとか…」

その答えをきいて俺達は納得した。燕は元が男子だから清涼学園にいるが、この事を知らない第三者には、おかしく見えるのだろう。半年でセミロングからロングになつた燕の髪を見ながら思つた。

「そりや残念だな。お前の分も楽しんでやるよ」

伸びたと言えば修もそうだ。身長が確か174cmから177cmまで伸びてゐる。俺は変わつていいと言つのに……ノヤロウ。

「女学院のお嬢様かあ。どんな人達なんだろう」

飾が頭の中で何かを広げてゐるようだ。そつとしておひづ。

「今こそ！俺等のなかに眠つたモテる才能を解き放つ時だ！高校生だというのに、女子と触れ合えないのは拷問だ！この一年に一度しかないこのイベントで、死んでも彼女ゲットするぞー？」

「おおー？」

教室の中央で雄叫びを上げる男子達。俺は彼等を横目で見ていた。交流会でどんな人達に会えるのだろうか、学校で会える同年代の人を、俺は頭の中で思い浮かべていた。

## つまり、他校交流会？ 2ページ

「えー、お前らも知つての通り、明日、温華女学院の生徒と交流会を開く。くれぐれも問題を起こさないように」

担任の先生の注意は、生徒の耳に入っているのだろうか？

「会場は、パーティーみたいになつてゐるから、自由にいられる。ただし制服で参加する事」

パーティーみたいって事は、ひきあひ駆走が出るのだろうか、なんだか楽しさだ。俺は交流よりも駆走に心奪われていた。

「ではこれでホームルームを終える。礼」

その盛り上がりは、寮に帰つてからも続いた。

「やつぱボタンは第一まで開けて、ブレザーの前は止めないよな」  
ここまで来るところから、期待しそうな気がするのだが。

無駄にカッコつねようとするやつらを無視して、俺は燕に話しかけた。

「なあ燕。お前俺達が交流会に行つてゐる間、どうするつもりなんだ？」

「どうするつて・・・別に何も」

燕は田線を馬鹿共に向けながら言った。

俺はどう返そつか迷つてしまつた。俺らがパーティーを楽しんでる間、こいつは一人でお留守番。心配することはないのだが、少し引っかかる。

馬鹿共を見ながら、俺は少し不機嫌になつた。

パーティー会場は、学園のそとで行うらしく、俺たちはバスで会場に向かう。バスに揺られながら思うことは人それぞれらしく、身だしなみの最終チェックをしている奴、カラオケと黙つて騒ぐやつ、なぜかトランプをしている奴など、それぞれが好きなように過ごしていた。

「猛。会場が学園の外って事は、一体どんなところなんだろうな」俺が窓の外に目を向けていると、前の席から優太が頭を出した。

「確かに。相手側あいてがわの学校も私立なのに、わざわざ外でやるんだ。

なんかとてつもない建物かもしれない」

俺は外から優太に視線を移して言った。

「やっぱそう思うか？だとしたら、どこに行くか予想がつきそうだけどな」

「でも温華じなつまむって隣町隣町だろ？だつたら学園じゃなくても不自然じゃない気がするけど・・・」

「だとしたら温華でパーティーをするのか？それはすゞく良いな」「何考えてんだ。女学院が男子招き入れるのかよ」

「家庭の事情とかあれば・・・」

「ある訳ないから。・・・っておいあの建物・・・」

俺は窓の外に映つた大きな建物を指差した。

その方向を見て固まる優太。バスの中も、建物に気づき始めた様で、驚きの声が上がっている。

「.....あんな豪邸つぶやでパーティーするのか」

優太がポツリと呟いた。

## つまり、他校交流会？ 3ページ

バスから降りた俺達は、目の前にある大きな建物を見上げた。白い壁には汚れが見えず、城の様な門を構え、庭はとてもなく広い。

「……なんつつー所だよ……」

もう感嘆の声しか出でこない。同じ私立でも、ここまで差があるのか。温華女学院。

俺達は、そのまま会場の中に入つて行つた。

会場内は外見に劣らない程豪華で、眩しくらいに輝いている。壁に一列に並ぶウェイトレス。そして、俺達が入つて来た入り口の向かい側に、このイベントの相手、温華女学院の生徒達が、ずらりと佇んでいたのだ。

瞬間、固まる清涼学園の生徒達。なんかピシッつて音が聞こえて来そうだ。そんな中、両校の先生が、中央で互いに挨拶をしている。その中にいた会場の管理人だろ？が、マイクを持つて喋りだした。

「えー、温華女学院の生徒の皆さん。清涼学園の生徒の皆さん。本日のパーティーを楽しんでいて下さい」

管理人の挨拶が終わると、会場内に音楽が流れ出る。音楽が流れるだけで、雰囲気がちがうな。

俺は固まっている男子達を放つておいて、近くのテーブルに行つた。すると温華の生徒も動きだした。

段々騒がしくなつていくパーティー会場。気が付くと、男子達もテーブルに食べ物を取りに来ていた。

「なあ、あの女の子可愛い？」「

俺がテーブルから美味そうな肉料理を取り寄せていると、飾が話しかけてきた。飾が指差した方向を見ると、遠くの方に、ボブカット

が似合う女の子がいた。その子は友達と話している様で、時々見せる笑顔が可愛らしい。

「気になるなら話かければ良いじゃんか。交流会なんだし、変に思われないだろ」「やつは言つてもよ~」

「飾はおどおどしている。ヘタレめ。俺はもう一度その女の子の方を見た。温華の長いワンピースの様な制服が似合っている訳ではないが、それは明るい色をした髪のせいだろう。

食べ物を口に運びながらその子を見ていると、その子の周りにいた子達がこちらに気付いた。変な空気になりそうな気がして、とりあえず手を振る。すると向こうも手を振りかえして来た。俺はポテトを取ろうとしていた左手を止め、飾の襟えりを掴んで女の子達の所へと歩いて行つた。

つまり、他校交流会？ 3ページ（後書き）

この物語を書いて一ヶ月。  
作中では七ヶ月。  
とんでもないスピードだ！  
次回は、話してみましょ！  
おつたのしみに

俺らが近づいて行くと、向こうが会釈をしてくる。一いつも会釈を返し、話しかけてみる。と言つても初対面でどんな事を話したら良いのだろう。

「こんなにちは

とりあえず、挨拶。

「い、こんなにちは」

女の子達も返してくれたが、

「…………」

会話が続かない。チラッと飾の方を見てみたが、凍つてしまつて使えそうにない。つてか、お前が話したがつたんだろう。

「あ、あの…秋永栞です」

何を話そうか迷つていると、ボブカットの女の子……秋永さんが口を開いた。正直、凄いホッとした。

「神鎌 猛。えつと…ようしく」

自己紹介と微妙なものだが、話題がないので仕方がない。自分のこ

とを伝えて、握手。

「門松飾です。」

解凍された飾が俺の横から手を差し伸べた。秋永さんがそれに応える。

「駒野絢香。こちらこそよろしく」

秋永さんのよこにいた人が言った。

自己紹介が終わると、話題がなくなつてしまつので、俺は急いで話題を探した。ふと、自分達以外の生徒が、このパーティーで交流できていない事に気が付いた。さつきからチラチラ見てくる。

「その制服って、どうしてそんなデザインなのかって、分かる？」  
声がしたので振り返る。見ると、飾が秋永さんと話している。

「いえ、考えた事も無いんですけど、そう言われば珍しいですね」  
秋永さんだけでなく、駒野さんも制服を見ている。確かに制服っぽくないな。

「清涼学園の制服は、ブレザーでシンプルなんだね」

駒野さんが言つた。

「ん？ ああ そうだな。 なんとかこういつ所には金かけないからな」  
意外にも、飾見つけてくれた話して会話が弾んでいた。その後も色々話していると、会場の管理人さんが、再びマイクを持つて会場の中央に来た。

「本日は時間ですので、ここいらでお開きになります。明日、明後日もありますので、皆様、楽しんで下さこ」

「あつ、じゃあ、また明日会いましょう」

秋永さんが言つた。俺はもうお開きかと思つて時計を見て驚いた。  
あくまで学校の交流会なんだし、すぐに終わると思っていたが、時計は七時をとつぐに過ぎていたのだ。

「神鎌ア。おいて行くぞ」

俺は、先生に呼ばれるまで固まつてしまつていたらしい。お陰で恥はじた。

「ぶふうー。たつだいまー」

バスに揺られて学園の寮に帰つて来た俺は、疲れた様にドアを開けた。

「疲れた様に見えたのは声だけかい」

元気良くリビングに入ると、燕が呆れた声で言つた。俺はその言葉を流して風呂の方へ向かう。

「パーティーはどうだつた？」

服を用意していると、燕が話しかけてきた。

「やつぱりパーティーは凄いな。ご馳走の量が半端ない」

「そうじや無くて、温華の子達とはどうだつたつて事」

「ああ、なんだかギクシャクして交流できて無かつたな。クラスの意気込んでた奴も、空回りしてゐみたいだつたし」

「ところで猛。なんで女物の服用意してんの？」

「交流会は七時まであるからな。気を抜くと時間的に強制的に女になる」

そう言つて俺は風呂にはいった。

交流会会場は、今度も大きな所で、またしても豪華な料理が並んでいる。俺ら五人は、会場をまわっていた。和樹達もついているのは、初日に温華の生徒と話したのが俺と飾だけだったかららしい。下心は凄いな。

「神鎌くん？ 今日は大人数でまわつてるんですか？」

四人の後ろについていると、秋永さんが話しかけてきた。振り返る

四人。

「ああ。秋永さんは一人？」

「いえ、皆の飲み物を」

「そつか」

俺は踵かかとで後ろにいる奴らの足を踏んづけながら言つた。

「せつかくの交流会なんですし、一緒に行きましょう」

「「「はい！」」」

俺の代わりに元気良く返事をしたのは、後ろにいるやつらだった。

秋永さん達のグループと話しているとき、ふと周りを見てみると、俺達の様に温華の生徒と話している男子がいた。流石に「田田」という事もあってか、話せないでいる奴は少ない様だ。

「へー、じゃあその文化祭は、劇をやつた四組が大賞をとったんだ」秋永さんといった草野さんが関心した様に言つた。

「おい！俺の事話したのか？」

俺は小声で修に聞いた。

「いや、お前と燕の事を隠しながら文化祭の事を伝えたんだ」修も小声で返して来た。その答えを聞いて俺はほつと安心した。俺の事を正直に伝えて、信じる人はいないだろう。下手すると、変な誤解を持たれてしまう。クラスの奴らが簡単に信じたのは、俺が実際に女になつたり男になつたりしていたからだ。

「その劇見たかつたですね」

秋永さんが本当に残念そうに言つた。他の女子も頷いていた。俺は相槌あいづちをうちながら聞いていた。

気が付けばもう時間で、俺達はまた明日と秋永さん達と別れた。その帰りのバスの中で、隣の奴がメアドをゲットしたと無駄に自慢してきて、非常に鬱陶うとうしかったのは余談である。

清涼学園と温華女子学院の他校交流会。最終日。三日間の交流会も、今日でお終いだ。この交流会で気になつたり好意を寄せている人がいた場合、生徒の多くはお互いの連絡先を交換している。一方的に女子の連絡先を聞くこととしてる男子は突っぱねられているが、逆だとなんとも無いようだ。ここから先の事は個人の事だが、先輩達の中で続いているのは四、五人位しかいないうらしい。まあどうでもいいか。

「へー。じゃあ、温華の生徒から見てもこの交流会は重要なんだ」「はい。みんな気合入れてますからね」

人つてのは知らない人達の中に知つてゐる顔を見つけると、ついついその知つてゐる人に話しかけてしまつ。てな訳で俺達は今日も秋永さん達と共にいる。昨日と同じ様な他愛ない話をしてゐると、駒野さんが横にいた。

「神鎌さんは、よく食べるね」

駒野さんが言った。

「猛でいいよ。こいつの料理は美味しいからな」

「なんだ。神鎌……猛君は、連絡先とかいろんな子と交換したの？」

「いや。交換したのはアンタらだけだな」

「なんだ」

「ん」

俺は話している飾達を見ながら、皿にとつてあつた料理を食べながら

ら言つた。

少し名残惜しそうな雰囲気が流れるパーティー会場。そんな中、突然先生達が何故か会場の中央にマイクを持って出てきた。まだ終了の時間では無いのだが……。そう思つてはいるが、先生達が口を開いた。

「えへ、皆様、今日は交流会の最終日という事で、会場の中央スペースでダンスをしませんか？えへ踊る人はこの中央スペースで、踊らない人はその周りのテーブルの所にいて下さい」

先生がそう言い終えると、会場に流れていた音楽おとが変わる。最後にダンスとはなかなか良い物だが、説明口調では興醒おきよめだな。

「ねえ、踊らない？」

横を見ると、駒野さんがこっちを見ている。

「そうだな。せっかく舞台があるんだし誘われてるし、踊らないと勿体無いな」

俺はそう言つて手を出す。中央では、何人かのペアが踊つている。ノリの良い音楽に合わせて人が動いている。制服では格好かっこいいが着かな  
いが、気にする人はいない。俺は、俺が差し出した手に駒野さんが応えた事を確認すると、その手を持って、中央に向かつて行つた。

つまり、他校交流会？ 6ページ（後書き）

そろそろ暖房が欲しくなつて来ました。  
ところで次回は、『一』ルします。  
お楽しみに。

ピリリリリリリリリ。

他校交流会から数日が経つたある日、俺の携帯がけたたましくなり響いたのは、学校が受験準備とかで暫く暇になると分かり、喜んでいた時だった。

「猛。携帯鳴つてるぞ」

「分かつてる」

携帯を取り出してディスプレイを見る。そこに映っていた文字は、

『駒野 紗香』。俺は通話ボタンを押した。

「あっ、もしもし猛君？」

スピーカーから聞こえた声は、何処か安心した様だ。

「もしもし? どうした?」

俺は聞いた。向こうは、しばらく沈黙した後、

「につ一時頃に保灯駅の前に来て。お願ひね!」

ブツッ。

……なんだ今の。俺は携帯の画面がめんをしばらく見ていた。

「なんだって?」

修が聞いてくる。

「いや、駒野がさ、保灯駅に来いって……」

携帯をしまいながら俺は答える。なんか一方的だったな。俺が忙しいとか考えないのか? まあ、暇だけど。

「で、どうするんだ? 行くのか?」

「暇だからな。それよりも呼ばれた理由が気になるね

「どうせ荷物持ちじゃねえの? それとも、デートか?」

「ソーゆーのつて男子から誘つよね。普通。ただの用事ではなさそ

うだけビ……」

「ともかく、一時に来いつて言つてたからな  
俺は少し溜息をついた。

「早いね。まだ一時になつて無いよ？」

駅に三十分前に行くと、駒野がすでに居た。聞くと、電話した時はもう着いて居たそうだ。だが俺が電話を受けた時間は十一時。一時間は待つて居たことになる。

「よくもまあ女子一人で一時間も駅前にいれたなあ」  
そう言つと駒野はピシッと音を立てそうな感じに固まつた。俺は呆れた。何してるんだこいつ。

「で、今日俺を呼んだ理由はなんだ？」

俺は固まっている駒野に聞いた。しかし返事が無い。

「おーい

頬を軽く叩くと、駒野ははつとしてこちらを見る。

「で、俺を呼んだ理由は？」

俺が改めて聞きなおすと、駒野はフフフと微笑んで、

「ちょっと買い物に付き合つて

と言つた。

「買い物？」

なんか凄い事を言いそつたから、俺はその答えに拍子抜けしてしまつた。

「そつ。買い物。分かつたらさつさと行くよ」

そう言つて駒野は俺の腕を引っ張り出した。

俺は引っ張りられながらひびきして俺を呼んだとか聞こつとした。

「歩きながら話すわ

駒野は引っ張りながら答えた。

街の中でも有名なショッピングモールで、俺は駒野と共にいた。歩きながら駒野から聞いた話を訊つと、こうなる。

「もうすぐ天冠さんの誕生日なの。あ、天冠さんは交流会の時の赤いストレートの髪してた子で、プレゼント決めたいんだけど、毎年私セーンス無いって言われてたから…」

「だそうだ。その言葉にどうして呼んだのが俺なんだと聞くと、

「だつて友達も誕生会に参加するし、言われると恥ずかしいし…」

それに、猛君つてなんか女の子っぽい時あるし

と返して来た。傷付くな。確かに俺は身体の都合で女の子になつたりして、文化祭の劇でそう言つのが貼りついた所はあるが、面と向かつてはつきり言わないで欲しい。

で、俺は今婦人服売り場にいる。プレゼントに服を贈るのだろうか？ そう思つて見ていたのだが、服を当てて、姿見を見ている駒野を見ていると、どうも違う気がする。

「ねえ。どっちの方が似合つと思つ？」

「プレゼントは？」

「あつ そう だつた」

こんな会話がさつきから続いていく。このままだと時間がすぎるのでけになりそうなので、俺は駒野に近づいた。

「誕生日プレゼントなら、小物にしたらどうだ？ ストラップとかさ」

「うーん、ストラップとかさ、どこかに行つた記念品とかの方が付けたいと思わない？」

「そんなもんなのか。よく分からん。」

再び服を見ていく駒野。俺は近くにあつた服を見てみる。あつたか

「そうなダウンのジャケットだ。これからのために一着必要か？」

「何見てるの？」

後ろから声をかけられた。振り返ると、駒野がこちらを見ている。

しかも変な物を見る目で。

「いや、その…あははは」

誤魔化し方が悪過ぎるが、良い言い訳が思い付かなかつた。俺は急いで離れた。

駒野は不思議そうな目を向けた後、再び服選びを始めた。

「ふーつ、これで大丈夫かな?」

買い物が終わつて、ベンチに俺らは座つてゐる。

「良いもんが選べたのか?」

「うん。今年はプレゼントを渡して苦笑を返されるなんて事にならなさそう」

その言葉に俺は苦笑する。服選びしてゐる時、駒野が選んだ服を組み合わせてみると、可愛い服が変に見える。「コーディネートがダメなんだなこいつ。

「……失礼な事考えてない?」

おつと、顔に出ていたか。にしても疲れた感じがするな。

そう思つていたら、駒野が立ち上がつた。

「今日はありがとうね。おかげで良い物買えだし、じゃ、また明日」  
そう言つて走り去つて行つた。駒野が人混みに消えて行つたのを確認して、俺は立ち上がつた。そのまま伸びをして、出口に向かつて行つた。

ピーんポーン

昨日の疲れが残っていたのか、俺が起きたのは午前十一時。そして惰眠だみんを貪っていた俺を起こしたのが、このインターホンである。

「ふあい？」

欠伸をしながら扉とびを開けると、なじみの四人が居た。

「このメール。どう思つ？」

そう言って携帯を突き出す和樹。俺は携帯を受け取つて、画面を見た。メールの送り主は温華の皆様。内容は、『休みを使って遊びませんか?』

と言つものだつた。

「どうつて…別に普通ふつうのメールだと思つが…」

「そのままスクロールしてみる」

は?スクロール?俺は不思議に思つて画面を移動させる。文字のした方に、添付てんぶつファイルがあつた。

『一泊二日、団体だんたいで山の宿屋にご招待!』

添付ファイルには、そう書かれたポスターの様なものだ。だがつまりこれは……

「お泊りで遊びませんか?つて事ことだよな」

「そうなるな」

俺らは、少しばかり固まつた後、

「マジでかああああああああ?」「？」

絶叫した。

「こんな昼間になに叫んでんの？」

俺達があたふたしていると、中から燕が出て来た。俺は携帯を黙つて燕に見せた。

「……やっぱり、この時期はこつゆーのが多いんだね……」  
燕は携帯を見て、不思議な表情をしたが、

「で？ 行くの？」

すぐいつもの調子に戻つて聞いてきた。

「え？ ……この旅行にか？」

「それ以外に何かある？」

あ、確かにそうだな。

「ああ行つて来る。一泊お泊りしてくるぜ」

答えたのは、俺では無く飾だった。

「そう…わかった」

そつ言つて燕は、部屋の中に戻つて行つた。

「じゃあかかり、猛になつて準備しろよ」  
優太達は、すでに大きな荷物を持っていてる。

……先に起こせよ。

「よつやく來たんだね」

集合場所である保灯駅に着くと、皆さんもうすでに集まつていた。

「そつちも五人か？」

修が黒髪を頭の後ろでくくつている女子、佐山さんに向かつて言つた。

「見たら分かると思けど…」

佐山さんは苦笑で返した。駅前に大きな荷物を持つている十人の子供。しかも十一月の平日だから、周りの大人の目線めせんがある。

「揃つたのなら行こう。電車だし、中で話さない？」

どこか不安そうな声で言つたのは、天冠てんがんさん。驚くつづ一かあり得ない名前だと思うよ。

「そだね。行こうか！」

呑氣な声で彩森あやもりさんが言つて、改札へと歩く。俺達もそれに続いた。

このお泊りは、色々な事が、起こりすぎたが。

つまり、大変なことに… 3ページ（後書き）

400000アクセス突破！  
嬉しいです。凄く嬉しいです！

さあ次回は、宿屋にGO  
おたの。

電車に揺られ、一時間。

今俺達の田の前にあるのは、山の中、古めかしく趣がある建物だ。

「ここが泊まる宿屋?」

俺は秋永さんに聞いた。

「そうですよ。良い所でしょ?」

そう言って笑う秋永さん。俺はもう一度宿屋を見た。看板には、「ととのい」と書かれている。確かに、良さそうな所だ。宿屋に入ると、着物を着たお婆さんが出迎えてくれた。宿屋の中はやつぱりと言うか和装で、でもフロントにあるソファが不思議な雰囲気を出していた。

「ではお部屋に案内させて頂きます」

今度はお姉さんという感じの人が出てきた。

廊下を通り、部屋に着く。

「じゃあ、私達はこっちの部屋だから」

佐山さん達はそう言って、部屋の中に入つて行つた。俺達も、その隣の部屋に入る。

部屋の中も和風で、畳の匂いがする。落ち着くなあ。

「荷物は置いたか?しつかりしてないと盗まれるぞ」

修が先生みたいな事を言つ。まあ俺達も元気良く返事をしたが……。

時計はまだ三時、確かに夕飯は七時に食堂でと言わっていたし、それまで暇になるな。

そう思った時、ドアからノックの音がした。

「散歩でもしませんか?この季節は、山は凄い綺麗ですよ」

ドアを開けると、秋永さん達が居た。山が綺麗、か。確かに、今は十一月だから、良い景色が見れそうだ。

「良いですね。何か持つて行く物とかは?」

「いえ、ありませんよ。山の中にある散歩コースを回るだけですか

ら。じゃあ、他の子読んでも来ますね」

短い会話の後、秋永さんは部屋の中に戻つて行つた。

俺達も軽く準備をするか。

「散歩行くの？」

部屋の中の男子の反応は、どこか面倒そつだ。風情の無いやつめ。

「発案者は秋永さ」「行くつ！」

今度は飛び起きる。この反応の差はなんだろうな。

俺達はバックから菓子などを取り出し、フロントに向かつた。フロ

ントにはもう秋永さん達が居て、俺達が近くと、

「早いですね。私達は準備出来てから読んだのに」と言つた。横に居るのは温華の五人。

「では、行きましょう」「おれたち

そう言つて、俺達は秋終わる山を見に、宿屋を出た。

つまり、大変な事に… 4ページ（後書き）

総合ユニーク6000突破！

皆様、本当にありがとうございます！

次回、山で。

みてね

十一月と言えどまだ秋。山は、葉をつけた木が並んでいる。だが、俺達が歩いて居るのは落ち葉の上で、どこを見ても赤、黄色の綺麗な景色が広がっていた。

「凄く綺麗だな」

「来て良かつたって気になるね」

「……なんか落ち着くなあ」

「あ、なんと無く分かります」

「疲れたなあ」

「日頃動いてなさすぎなんだろ」

散歩コースを歩いている人は、俺達の他にも数人いたが、やはり平日だからか、そこまではいない。俺は整備されたコースの脇にある木々を眺めていた。

「あの……えっと……神鎌君」

ふいに話しかけられた。見ると、天冠さんが居る。

「ん? どうかしたの?」

俺は木の根っこを飛び越えて聞いた。

「その服、少し気になつて」

「?」

「いや、なんか他の男子と服の感じが違うから」

「ああ、成る程」

俺の格好はジーンズ、長袖のシャツ、そして青い羽織もの。特徴が無いにも程があると言う様な格好だ。だが

「天冠さんも似た様な服装だよな」

そう言つて天冠の方を見て、俺は固まつた。この人、俺よりも

身長高い……

「あの、大丈夫ですか? おーい」

放心状態になつて居る俺の肩を叩きながら、天冠さんが問いかける。

「…………大丈夫です」

「暗くなつてますよ？」

俺はなんとか作り笑いをして、歩き出す。前のグループも、会話が弾んでいる様だ。

俺は、そのグループに近づいて、会話の中に入つていった。

散歩を終え、宿屋に戻つた俺達は、部屋の中に戻つてすぐ、ゴロンと横になつた。時計は五時をさしていて、もつ外も薄暗くなつている。

「意外と疲れたなあ」

優太が寝転びながら言つた。その横で修がお茶をいれている。

「山道だからな」

俺は部屋の中央に置かれているテーブルに菓子を出しながら言つた。菓子が拡がると、ゴロンとしていた奴らが起き上がって來た。

「こうやって男子校に居ながら女子と出かけられるつてのは幸せだねえ」

菓子を食べながら飾が言つた。こぼすなよ。

「男子校どのはともかく、大人数でこう言つ所に来れるのは良いよな」

俺はお茶をすすりながら言つた。

「夕飯前に風呂に行こうぜ」

ふと、和樹が言つた。テーブルの上の菓子が無くなつた頃だ。時計は五時半をさしていた。

「ん、風呂か。良いな。行こうか」

夕飯は七時だし、まだ余裕がある。俺達は、必要な物を持って宿屋

の大浴場へ向かつた。

「気持ち良かつたなあ」

「ドライヤーで髪を乾かしながら、俺は呟いた。

「確かに良い湯<sup>ゆ</sup>だつたな」

修も同意した。和樹達も髪を乾かしている。

宿屋だからか、とても広い風呂<sup>ふろ</sup>を使えるのは、凄いよな。さっぱりした。

俺達は、荷物を持って、脱衣所<sup>だついじょ</sup>から出た。すると、俺達が出て来たところの右隣、つまり、女湯の方から、秋永さん達がでてきた。

「あ、そちらもお風呂<sup>ふろ</sup>に入つてたんですねか?」

秋永さんが言つた。

「はい。……えつと……天冠さんはどうしたんですか?」

「あ……あの子は今日は……その……用もので」

ああ成る程<sup>ほど</sup>と、飾達は頷いた。

「じゃあ、この後食堂でね」

彩森さんが、そつ言つて俺達にウインクした。

食事を終え、部屋に戻り、後は自由にした後眠るだけの俺達は、暇<sup>ひま</sup>を持て余し、部屋にあつたテレビを、なんとなくつけてなんとなく眺めている。もう何杯飲んだか分からなくなつたお茶をすすりながら、俺は、テレビに映るタレントを見ていた。

突然、優太の携帯が跳ねた。優太は携帯を持って開く。そして、「別に電話じゃなくても良いんじゃないかな？」

と言った。俺達は聞き耳を立て、相手が誰か探ろうとした。優太はそんな俺達に気がついたのだろうか、クスッと笑って壁を指差した。その壁の向こうには、秋永さん達が居るはずだ。俺達は納得して、テレビを消し、優太のそばに行つた。静かになつた部屋の中では、少しだが、相手の声が聞こえる。

「あれ？ そつち急に静かになつたね。どうしたの？」

優太の携帯から秋永さんの声がする。

「いやな、男共が聞き耳を立ててるんだよ」

「えーつ？ 人の会話を聞くの？」

優太が苦笑する。何も言えない俺達。

「それで、わざわざ電話じゃなくても良かつたんじゃないの？」

「私達は今寝巻きだもん。だからちょっとね」

「ふーん。だからか。つておい和樹何睡のんでんだよ。

「それでさ、そつちは今何してるの？」

「今は携帯の音を聞いてるよ」

「あっ、じゃあ今まで何してた？」

「テレビ見てたな。何となくで」

電話の向こうからそうなんだと聞こえてくる。

「ところで、なんで電話かけてきたんだ？」

「それこそなんとなくだよ」

「なんとなくで掛けてくるか。凄いな。

「日付変わつてヤツホー。元氣か？」

突然、電話から聞こえてくる声が変わつた。誰かと代わつたのだろうが、ノリがラジオです。

「元氣ですよヤツホー。そちらはどうですか？」

優太から携帯を奪つた修が、同じ様なノリで返す。

「なつ、そちらこそどなたですか？」

なんか、和む。その後も携帯を使ってお喋りしていたら、何時の間にか朝日が窓から差し込んだ。どうやらかなりの時間喋っていた様だ。電話の向こうと和樹が、ながでんわ長電話し過ぎたと悲鳴を上げた。

つまり、大変な事に…

7ページ（前書き）

なんとか今日中に書き切れました。

日が登つては仕方が無い。俺達は着替えて、ロビーに向かった。

別にロビーで何がある訳でもないが、唯なんとなく暇を潰したかつた。ロビーには、雑誌や軽い小説などが置いてあり、俺達は適当な雑誌を取つて、クロスワードパズルを解いたりしていた。俺はうーんと伸びをした。そして、ふとフロントの方を見ると、秋永さん達がやって来た。時計を見ると、七時を指している。成る程。朝食か。

「こつちにいたの？ 探したよ。部屋に居なかつたからや」

佐山さんがこちらに気がついて話しかけて来た。

「暇だつたもんで」

雑誌をしまつて俺達は立ち上がつた。

朝食を終えた後も、俺達は適当に部屋に居た。暇だなあと思つていると、時間がとてもゆっくりに感じる。窓の外は、木々が葉っぱを落としていた。

「…………？」

突然、頭が重たくなつた気がした。それと同時にもの凄く眠い。だが別に暇だし、眠つても良いか。だが、このどつじょつも無い眠気。どこかで体験した気がする。そう、結構前に……

「暇だからちょっと遊びに来たよー」

部屋のドアから秋永さん達の声を聞くと同時に、俺は畳に倒れ込んだ。

「う…ううん」

目が覚めた。起き上がる。周りを見ると、秋永さん達が驚いた表情をしている。修達は、呆れた顔をして俺を見ている。なんだうつ。

「その…猛君なの？」

秋永さんが不思議そうに見ている。頭をかこうとして、量が多い髪に触れて、俺はどうして秋永さん達が不思議な表情をしているのかが分かつた。

俺は不思議な体质だつたと。

さつきまで忘れていた。そうだった。あの眠気は徹夜した時に起くる強制変化だ。もちろん、温華のおんか人達には教えていない。まったく、凄いドジ踏んだもんだ。

「あ…あの…」

呆然と俺を見ている秋永さん達に説明しようつと口を開いた時だつた。

「つかわいい！」

彩森さんが、佐山さんが、草野くさのさんが、俺に飛びついて來た。

「ふわつ！」

押し倒される俺。

「何この髪。どうやつたらこんなに綺麗きれいで真つ直ぐでいられるの？」

「しかも真つ黒。濡鳥色ぬれがラスいろつてこんな色の事を言つんだらうなあ

「顔が何より美人！このほつぺー可愛い！」

「ち、ちょっと、少し落ち着いて…」

「男物の服なのがなあ」

「じゃあ着替きがえさせれば良いじゃん」

「賛成！」

「さ、男子達は外いつた！」

佐山さん達にまくしてられ、部屋の外に行く和樹達。何故か天冠てんがんさんも出て行つたが、助けてくれよ。

「さあ、どんなお洋服を着させようかしり」

笑顔を浮かべる彩森さん。それは俺には、悪魔の様に見えた。

つまり、大変な事に…

7ページ（後書き）

第五十話？

文字数は少ないので無駄にページが多いこの小説ですが、五十話と言つ節目にきました！

次回は、知った事。おたの。

この体质になつてからだいたい七ヶ月経つていて、別に女物の服に慣れていない訳じゃないが、このミニスカートと言つ物、全く落ち着かない。

今までは、見た目の違和感<sup>いわがん</sup>を消すために女物の服を着ていたから、殆どがズボン系だ。スカートなんて、制服と劇の衣装<sup>いしょう</sup>位でしか着た事ない。それに、男子校に居た為に女子のオシャレと言つものを全く知らない。だから、この黒タイツも落ち着かない。

服が一通り「一 デイナー」し終えた様で、今度は髪<sup>レジヘ</sup>が弄<sup>レジヘ</sup>られる。落ち着かない。全く持つて落ち着かない。

「やっぱり髪の毛の先端は少し内側にクリン<sup>クリン</sup>ってさせた方がいいなあ」

体の前におりている髪を、ヘアアイロンで整えて行く彩森さん。されるがままの俺。

「これで良いかなあ？」

俺の顔を見て呟く女子三人。

その後これで良いかと頷いて、外で待っている人達を呼びに行つた。しばらくして、俺の所に戻つて来た彩森さん達は、俺を見ると、「えつ？なんでもう落ちてるの？」

声を上げて目の前に迫つて来た。本当に目と鼻の先にだ。俺は驚い<sup>いよいよ</sup>て仰け反る。だが彩森さんは俺の肩をガシッと掴んで更に顔を近づける。

「ちよ…ちよっと…」

俺が困惑の声を上げると、彩森さんは胸におりている俺の髪を持つて、

「さつきかけたはずなのに…」

「凄く強いストレートだね…」

佐山さんも呟く。見ると、先程少し丸めて貰つた毛先が、今はもうまつすぐに降りている。驚いている理由はこれかと思つていると、後ろから男子達がぞろぞろとやって来た。奴らは俺を見るなり

「…………誰？」

記憶喪失になつた様だ。

なんてのは嘘で、すぐに、やれ可愛いだのなんだの散々聞かされた褒め言葉を言い出した。

俺は鏡を見ていないから何とも言えないが、まあ多分大丈夫だろう。こいつらも褒めてるし。それよりも、彩森さん達が離れてくれないと、俺、動けないんだが。

「で、どうして急に女の子になつたの？」

ずっと部屋の中でこちらを見ていた秋永さんが問いかけてきた。

「そうだった。ねえ、さつきまでホントに男の子だったよね？」

彩森さんが俺から離れて、座りなおして聞いた。

「今から軽く説明するよ」

俺も座りなおして、そして、まっすぐ彼女たちを見て、説明を始めた。

「ふう~」

一通り説明をして、落ち着いた俺は、何か飲み物を飲もうとロビーに出た。温華の五人も、納得してくれたようだ。さつき部屋に戻つて行つた。自販機でカフェオレを買って、椅子に座ろうとした時、天冠さんが目に入った。隣に座ると、天冠さんも気がついた様だ。

「そのカフェオレ、最近発売したやつだよね」  
話しかけて来た。

「うん。天冠さんは……「コーヒーなんだ」  
俺はカフェオレにストローを差し込みながら言った。  
「まあね」

そう言って天冠さんは笑った。

「どこか中性的な話し方をするなと思つていたから、何かあるんだ  
もうとは思つていたけど」

「まさかこんな体质だとは思わないよね」

俺は天冠さんの言葉を引き継ぐ。天冠さんは笑つて「コーヒーを口に  
含んだ。俺は気になつていた事を聞いてみた。

「ところで、天冠さんって……男性？」

「ぶつ？」

「コーヒーが吹き出る。俺は驚いて天冠さんを見るが、噎せてしまつ  
ている様だ。背中をさすつてやつて落ち着かせると、天冠さんはこ  
ちらを向いた。そして、

「…………何で分かつたの？」

と言つた。

「えと……なんて言つかな。女子の振る舞いとかを強制された人つて、  
どこか硬いと言つか、不自然つて言うか……」

俺がそう言つと、彼は不安そうな顔をする。

「でも、俺……私以外気付いてないみたいだし、ほ、ほら、こつちも  
女子になつたり男子になつたりで色々やつてるから……」

そう言つと、少し安心した様で、彼は座り直した。いつから行つて  
いるのかその姿勢は、女の子のそれである。

「でも、どうして温華に？」

そう尋ねると彼は、息を吸つて、天井を見た。

「……交換条件みたいな物で、家が財政的に危なかつたらしくて、

それで、学校に相談に家族で行つたらさ、その時に校長先生に、『  
その子を我が校に入学させると書つのなら、協力致しましょ。入  
学させるだけで良いので』って……』

「…………

近くで見ても、確かに『美少女』だよなあこの人。天冠さんには申  
し訳ないけど、その校長先生の判断、正しいと思つ。  
俺はカフェオレを飲みながら思つた。

ピリリリリリリリ

その時、けいたい携帯が鳴つた。みて見ると、そろそろ宿屋を出るから部屋  
に戻つてこいと書かれてある。俺はその事を天冠さんに伝えて、荷  
物を取りに部屋に向かつた。

「じゃあ、またね！」

佐山さんがそう言つと同時に、電車のドアが閉まつた。俺達はその  
車両を見送つて、今学園に帰つている途中だ。

宿屋は結構楽しんだな、やっぱり。

「たつた一日で、駅前もこんなに変わるのが  
不意に修が眩いた。つぶや顔を上げると、イルミネーションがあちこちに  
飾られている。

「本当だ。まだ十一月はいるつて時なのにな  
飾が言つた。

俺はふうっと息を吐いて、見えにくくものの、息が白くなる季節きせつ  
である事を確認した。

つまり、大変な事に… 8ページ（後書き）

五十話超えて浮かれて少しだけ長いです。  
が、何かやつちました感があります。

さあ次回は、季節の行事。  
お楽しみにね。

つまり、クリスマスって訳。 1ページ（前書き）

いよいよ物語が現実を抜かしましたw

町が、国が、人が、どことなくウキウキして見える。駅前を通れば輝かしい光の装飾があり、お店には大きな偽物の木が売り出される。そう。十一月にある、子供の頃にほとんどの人が楽しみにしていたであろう、クリスマスが近づいているのだ。

だが、高校生になると楽しみになるクリスマスも、妬ましいものにしか感じない人達もいる。それは、教室を見渡せば、嫌でもわかる。先日の交流会で、はたまた他の場所で出会いをして、予定が埋まっている者もいるが、それは少数だ。

歓喜と怨念の混ざったような教室から逃れるように、俺と燕は屋上の前の踊り場にいた。屋上の外に行つたほうが安全なのだが、外は寒いし、第一鍵がかかっている。教室はストーブがついていて暖かいのだが、昼休みに教室にいたら、怨念渦巻く生徒にまとわり憑かれるので、寒い中マフラーに顔をうずめて、誰も来ませんようにと願いながら過ごしている。無駄に広いこの学園にも始めて感謝した。

「はあーっ

かじかんだ手先に息を吹きかけて暖める。

「寒いねえ」

屋上のドアに寄りかかりながら燕が言った。そうだねと俺は返した。「クリスマスだからって、少し浮かれる程度でいいのに、みんな躍起になつてさ」

俺はため息がちに呟いた。お祭り的みたいにさわぐですませられないのかねえ。

「無駄に外がロマンチックに装飾されているからってね」

燕も困つたように笑う。

「みんなムードに流されるんだよな。まあ、恋愛にはムードも重要なかもしねいけど」

「どこかに出かけるのも疲れるし、寮でゆっくりするのがいいね」「それは年末が自然と寮でまつたりすることになるよ。せっかくだし、イルミネーションを眼下に時計塔から星でも見よつか」

「それもなかなか口マンチックだね」

話していると、鐘が鳴つたので、俺と燕は教室に戻る事にした。

「つまり……どうゆうこと?」

「ゆっくりしたいってこと」

和樹たちに俺達の意思を伝えると、ほんの少し和樹たちは固まった。またどこかに連れていいく計画でもしていたんだろうが、教室の男子達から刺さるような目線を浴びている俺たちは小さいぱーちーで十分だ。

「しかしクリスマスだってのに部屋でゆっくりするだけだなんてつまらんな」

優太が顎に手を添えて言った。

「でも遊びに行くのはいやだつて言つしよ」

とぶう垂れる飾。

「ほかはないのか?クリスマスらしいことつて」

修が言った。イベントには手を抜かないなあこいつら。

そう言いながらも、俺もこのままだとなあ、的なことは考えていた。しかし案が思いつかない。どこかに遊びに行かなくても、クリスマスらしい雰囲気が楽しめるものはないのかな?

「えーっと

不意に、燕が声をあげた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2964x/>

---

つまり

2011年11月25日20時58分発行